# 藝大通信

## 特集 これからの芸大

**座談会　芸術教育がになう役割と課題**

遠山敦子文部科学大臣
樋口廣太郎東京芸術大学運営諮問会議議長
澄川喜一学長

**教育と表現の現場から**

中林忠良・三田村有純・藤幡正樹
山本邦山・野平一郎・實相寺昭雄

**新連載［タイムカプセルに乗った芸大］**

佐藤道信〈東京美術学校 1903年 秋〉
瀧井敬子〈東京音楽学校 1901年 秋〉

創刊号
01
OCTOBER
2001

TOKYO
GEIDAI
東京芸大広報誌

# 藝大通信

## No.01

TOKYO GEIDAI
東京芸術大学広報誌

## 刊行にあたって

大学の改革が叫ばれています。とくに国立大学は法人化を目前にひかえ、統合再編や重点支援など大幅な構造改革が求められています。東京芸術大学も例外ではなく大きく揺れ動く社会に対し、自らの存在とその意義を示していかなければなりません。いま我々が何を考え、何をしようとしているのかを知ってもらう必要があります。同時に学外からの視線を受けとめる姿勢も大切で、その知る、知らせるための媒体としてこの広報誌「藝大通信」を企画し、今回の刊行にいたりました。その時々の話題やいま直面している諸問題などを「特集」記事として掘り下げ、さらに多面的な角度からの「芸大について」の情報を分かりやすく紹介します。ビジュアル的にも芸大らしさを大切にした親しみやすい誌面構成を心がけたいと考えています。

今回の創刊号では、巻頭に特集のテーマ「これからの東京芸術大学」について、遠山敦子文部科学大臣と樋口廣太郎東京芸術大学運営諮問会議議長のお二人に澄川喜一学長が加わって、大いに語っていただく座談会を企画いたしました。さらに「教育と表現の現場から」では本学の教官６人へのインタビューなどを掲載いたしました。心から感謝申し上げます。

今後、この「藝大通信」は本学における広報活動の中心的役割を果たすことになると考え、年に３号から４号のペースで発行する予定になっています。今後の充実した内容のためにみなさまの忌憚のないご意見やさまざまなご協力をいただき、より充実した広報誌にしたいと考えています。

藝大通信編集委員長
副学長（企画担当）
伊藤隆道

「ワークショップ－落差－」
STUDYROOM 1998 -東京芸術大学日比野克彦研究室展
1998.3.24　ミツムラ・アート・プラザ

**日比野克彦**（ひびの・かつひこ）

1958年岐阜県生まれ。84年東京芸術大学大学院美術研究科修士課程デザイン専攻修了。95年同大学美術学部デザイン科助教授。99年同学部先端芸術表現科助教授。2000年4月、過去1年間で最も優れたデザイン活動をした「デザイナー・オブ・イヤー」として、アートやデザインの分化分業を越えた多彩な活動により、1999年度毎日デザイン賞を受賞した。


**東京芸術大学広報誌　藝大通信第１号**

編集発行　東京芸術大学広報委員会
編集委員　伊藤隆道（副学長・美術学部デザイン科教授）
長谷部浩（美術学部先端芸術表現科助教授）
渡邊健二（音楽学部器楽科助教授）
永井隆夫（事務局長）
アートディレクター　蓮見智幸（美術学部デザイン科助教授）
制作　株式会社　平凡社
発行日　2001年10月31日



**お問い合わせ先**
東京芸術大学総務課
〒110-8714　東京都台東区上野公園12-8
電話　03-5685-7509　FAX　03-5685-7760
e-mail　jkikaku@off.geidai.ac.jp　URL　http://www.geidai.ac.jp


**第１号目次**


3–15　特集　これからの東京芸術大学
4–9　座談会 芸術教育がになう役割と課題
遠山敦子文部科学大臣
樋口廣太郎東京芸術大学運営諮問会議議長
澄川喜一学長
10–15　インタビュー 教育と表現の現場から
中林忠良／三田村有純／藤幡正樹／山本邦山／野平一郎／實相寺昭雄
16–17　新連載 タイムカプセルに乗った芸大
【第1回】1901年～1910年
佐藤道信〈東京美術学校1903年秋〉
瀧井敬子〈東京音楽学校1901年秋〉
18–20　開かれた大学　公開講座が果たしてきた役割
浮遊する造形（モビール）／住民のための建築学校／指揮法講座／オルガンを知ろう
平成13年度公開講座／受講方法等について
21　NEWS 2001.4～10
22–23　学生のいる風景①　2001年度芸術祭レポート
戸島麻貴〈芸祭伝説〉
24–27　芸大短信2001. 11～2002. 2
24–25　秋から冬への大学美術館
［デザインの風］展／平山郁夫・金興洙二人展
26–27　秋から冬への奏楽堂
"うた"シリーズ1　日本歌曲の流れ／芸大定期邦楽第63回演奏会

特集

# これからの東京芸術大学

二十一世紀を迎えて、芸大は〈感性教育〉の拠点として、何を果たしていくべきか。
学長を囲んでの特別座談会と、六人の教官へのインタビューで探る、芸大の未来像。

座談会

# 芸術教育がになう役割と課題

時代が変化を求めるとき新しい芸術は生まれ、時代を切り拓く――。
文化立国に向けて芸術が重要視されるなかで、東京芸術大学には牽引役としての
役割が期待されている。歴史ある芸大が21世紀に果たすべき課題とはどのようなものなのか。
遠山敦子文部科学大臣と樋口廣太郎東京芸大運営諮問会議議長にお集まりいただき、
澄川喜一学長と、本学の今後のあるべき姿を語っていただいた。

## 経済大国から、文化立国へ

**澄川**　本日はお忙しいところお集まりいただきまして、どうもありがとうございます。

東京芸術大学ではこのたび学外向け広報誌「藝大通信」を創刊することになりまして、お二方にぜひ、今後芸大が果たすべき役割や課題についてご意見を伺いたいと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

歴史を振り返りますと、芸大美術学部の前身、東京美術学校の前史である工部美術学校が開設されたのは一八七六年（明治九年）のことです。明治維新の五年前、一八六三年に伊藤博文らがロンドン大学へ留学して、当時の進んだ西欧文明を目のあたりにして大きな衝撃を受けたわけですが、日本を近代国家にするにはまず人材を育てなくてはいけないと、彼らは帰国後に工部大学校（現在の東京大学工学部）を設立しました。同時に、柔軟な発想と創意工夫のできる感性豊かな人材を育てるために設立されたのが工部美術学校、そして改めて創立されたのが東京美術学校、いまの芸大なんです。音楽学部については、音楽取調掛の設置（一八七九年）と、それを改めた音楽学校がもとになっています。国を興すには技術と芸術という二つの「術」が欠かせないということだと思います。

**遠山**　日本はここ十年以上経済が停滞し、国民も誇りを失い始めています。かつての輝きを取り戻そうと、小泉政権は構造改革を推し進めていますが、たしかに経済というのは非常に大事ですけれども、その国の品格を表し、伝統を伝え、将来の創造につなげる役割を果たすのは文化だと思います。日本には優れた文化と伝統がありますが、これらを継承していくと同時に、現代にマッチさせ発展させていくことが重要になってきます。その意味で芸大は、芸術文化を専門的に深く究めている日本唯一の国立大学であり、歴史的にもたいへんな蓄積をもち、すばらしい人材を数多く輩出しておられる。「文化立国」（★1）という面でも、芸大に寄せる期待は非常に大きいですね。

**樋口**　極端に言いますと、芸術がなくても人間は死なないんです。しかし、芸術は、社会に大きな活力を与え、変化を投げかけることができる。たとえばルネサンスがそうであったように、歴史を振り返ると、日本でも西欧でも文化が栄えている時代には必ず変化が求められている。見方を変えれば、変化があるときに文化が生まれると言えるかもしれません。いま、日本に必要なのは変化ですが、それを促すのが芸術なのではないでしょうか。

神話を例にしますと、天照大神（アマテラスオオミカミ）が天岩戸（アマノイワト）に隠れたとき、世の中は暗くなりました。要するに、光を持っている人、明るい人がいなくなったら暗くなってしまう。そこで天鈿女命（アメノウズメノミコト）が岩戸の前で踊ると、天照大神はにぎやかさにつられて思わず岩戸を開けてみる。そこを手力雄神（タヂカラオノカミ）――いちばんの力持ちが一気に岩戸を開けて、光がさしこむ……。手力雄神は経済、天照大神が芸術ですよ、これは非常に象徴的だと思います。

## 新たな芸術は、つねに作品から始まる

**樋口**　私が日本文化のなかで興味を惹かれるもののひとつに、鳥羽僧正（とばそうじょう）の「鳥獣戯画（ちょうじゅうぎが）」があります。サルとかウサギ、カエルを擬人化する、言ってみれば「マンガ」のはしりですよね。時代がずっと下がり、明治時代になって、岡本一平がマンガを描いたときにも、画家がマンガを描くとは何事かといった批判があったけれど、夏目漱石がこれはおもしろいじゃないかと評価した。明治きっての知識人がそう言ったとたん、マンガに対する世の中の感覚が一転してしまったんです。そうした芸術の流れを見ると、日本はおおらかですよね。西欧の場合は、キリスト教に仕えるものでなければ認められなかったわけですから。

いまの話でもう一つ言えるのは、新しい芸術は理論から始まるのではないということです。芸大の歴史を見ても、美術学校第一期生の横山大観に始まり、錚々たる作品群にまず目を奪われます。いま、芸大の運営諮問会議の議長をやらせていただいていますが、理論ばかりで作品をつくらない人が芸術を教えるというのはおこがましいのではないかといった話が出ます。作品づくりを意欲的にやるには発表の場がまず必要ですが、それが奏楽堂であり、大学美術館だと私は思います。やはり作品そのものがエネルギーになっていくのではないでしょうか。

私は東京都現代美術館の館長もやらせていただいていますが、着任してから最も盛況だったのは、ファッションデザイナーの三宅一生さんの展覧会でした。ドイツにも巡回して大成功しているようですが、作品あっての芸術とつくづく感じます。もちろん理論も大事ですが、理論の一歩手前というか、物事を考える上の手助けをすることが芸術の根本なのではないか。芸術がなくても人は死なないけれど、あったほうが楽しいし、豊かにしてくれる。世の中を変えることもできると私は考えておりますから、芸大の運営諮問会議にもますます活力を与えていきたいと思っております。

**澄川**　芸術にかぎらず、人が生活していく上では創意工夫が必要です。何か問題に直面すると、どうやって解決しようかという創意工夫の意欲が湧いてくるわけですが、それが芸術なのではないでしょうか。「芸術」というと言葉が硬くなりますが、人生のあらゆる場面で創意工夫のできる人材を育成していきたいと思います。

芸大を出て、職業的な芸術家になる人もいれば、日常生活のなかでフラワーデザインやインテリアデ

**★1 文化立国**

一九九八年三月に文化庁が策定した「文化振興マスタープラン―文化立国の実現に向けて―」に基づく文化行政の総合的推進政策目標。

「文化立国に向けて」と副題が付けられた「平成十二年度教育白書」（文部科学省）では、次のように記載されている。

「文化庁では、文化行政の基本的な役割は、伝統的な文化を踏まえ、個性ある文化を振興することにより、心豊かな社会の実現に資するとともに、これを世界に向けて発信し、人類の文化の進展に資することであると考えています。このように、内にあっては文化をもって国民共通のよりどころとなし、外にあっては文化をもって国の『顔』となす国家を文化立国と位置付け、その実現に努力していきたいと考えています。」

**遠山敦子**
**とおやま・あつこ**

文部科学大臣
1962年東京大学法学部卒業。
文化庁次長、文部省高等教育局長、文化庁長官、駐トルコ共和国特命全権大使、国立西洋美術館館長、独立行政法人国立美術館理事長ほかを歴任。
01年4月より現職。

ザインを続けていく人もいるでしょう。水は地表を川となって流れているだけではなく、地下の深いところでも脈々と流れているように、必ずしも表立ってはいなくても、さまざまなところに浸透して生活文化全体を引き上げているわけです。

**遠山**　先般、大学美術館でおこなわれた先生の退官記念展「そりのあるかたち」（二十一頁・NEWS欄参照）を拝見しまして、非常に感銘を受けました。いろいろな素材を使いながら素材の心を読み取り、ご自分の主張を投入して非常に美しい形へと昇華なさっていますね。芸術家は自分のすべてを作品に投入し、人間そのものが充実していないと作品もいいものにならない。これは非常に大事なことです。大学教育はその辺を自然と悟らせるものになればいいと思います。

　また、最先端を行く芸術家は、その人が生きているときは固有名詞を持ち、渾身の力を込めて表現されるわけですが、幾世紀か経ると、その芸術家が切り拓いた時代や特色を継ぐ人たちが出てきて、ある普遍的な芸術文化の層を形成し、やがてはその人を生んだ国の文化になるんですね。つまり、一人ひとりの芸術家の活躍は、同時代に生きる人びとの心を豊かにするだけではない。彼らの芸術が次第に蓄積され、それぞれの作品が燦然と輝き続けると同時に、一国の豊かな土壌をつくっていきます。その意味でも、芸術家たちはとても大事な存在なのだと思います。

**樋口**　芸術のなかには、たとえば「琳派」のように工房というかたちで伝承されていくものもありますね。実を言いますと私の先祖は琳派でして、もとは北面の武士だったのが、趣味がこうじて樋口という姓を捨て、丸屋半兵衛という金蒔絵師になったんです。デザインは尾形光琳や俵屋宗達が描いたかもしれないけれど、彼らが石を彫ったり金蒔絵を描いたわけではないのです。

**遠山**　琳派の残した芸術は当時としては非常に斬新なものだったのでしょうが、今日、私たちの目から見ても、やはり時代を画していると思います。桃山時代の絢爛豪華な芸術の革命的な時期は、琳派だけではなくて、能楽をはじめ茶道とか華道とか、さまざまなものが発展した時期でもあります。わが国の誇る一時期で、その後江戸時代に入っても、ずっとその成果は引き継がれています。

　一人の優れた人が作品を残し、その人が大きな組織なり集団をつくって力強く引っ張ることで、一つの時代を画していく――。それは国にとっても、文化の大事な転換点でもあります。音楽でも、バッハがそれまでの時代の集大成をし、その後モーツァルト、ベートーヴェンと次々に継承・発展させる音楽家が出てきましたが、バッハの音楽はいまも輝きを放っています。こうした波及効果は最初に走る人はとくに自覚してはいないのでしょうけれど、だからこそ行政や社会は芸術の波及効果の大切さを認識して、優れた個性が伸びていくよう支えていく必要があるのだとあらためて感じます。

**樋口**　文化庁、あるいは文部科学省の果たしている役割はますます大きくなると思いますね。そういう面では私も非常に喜んでやらせていただいておりまして、財政制度審議会でも私がやらせていただいてから予算が二倍になりました。つまり、芸術のもつ波及効果や重要性は、国も認めているんですよ。

　芸術を生み出す方たちへの期待として申し上げたいことがあります。染付陶芸作家の近藤悠三さんが言った、「職商人」という言葉なんです。芸術家は職人であると同時に、商人でなければいけない。つまり、いいものをつくったのだから褒められて当たり前というのではなく、どういう工夫をしてこれをつくったかを説明できて皆から評価されるようでなくてはならない、という意味です。商人というのは金儲けという意味じゃなくて、説明責任、いまで言うアカウンタビリティですよ。

**澄川**　たしかに、ただ閉じこもっていたのでは理解してもらえません。

## 映像芸術の研究・教育がより重要に

**樋口**　東京都現代美術館では、いま村上隆さんの展覧会（八月二十五日～十一月四日）を開催しています。彼は東京芸術大学で日本画を勉強して、そこからアニメやマンガ、ゲームといったサブカルチャー領域に切り込んでいますが、横浜美術館ではほぼ同時期に奈良美智さんの展覧会（八月十一日～十月十四日）をおこなっているんです。彼は村上さんより二歳年上で愛知県立芸術大学の出身ですが、いわば良きライバル同士である二人の個展を同時期に開催することが相乗効果となって、お客さんが両方とも観たいと、東京と横浜の両方を行き来しているんです。もともと彼らはサブカルチャー的なものをやるつもりでスタートしてはいませんけれど、お

二人とも時代の要望に合ったということでしょう。

**遠山**　二十一世紀はＩＴの時代でありますし、それから国民の興味、関心の種類が従来型のものだけでは満足しなくなっています。そこで、今後さらに重要になってくると思うのが映像文化です。映画やアニメのような映像芸術は、日本にとって非常に得意な分野でもありますね。これをもっと伸ばしていく必要があって、新しい映像文化についての研究なり教育なりを充実したいものです。思えば、現代の大変優秀なアニメ作品の先駆けとしては、さきほど樋口さんがおっしゃった「鳥獣戯画」もあるわけですし、映画の分野では、黒澤明監督のように世界に誇るべき作品を生み出してきましたが、映像の文化についても、ぜひ世界を先取りする作品を発信してもらいたいと思います。映像の醸し出すインパクトや感動は、世界の人々を揺り動かす大きさを持っています。

**澄川**　一九四九年（昭和二十四年）に美術学校と音楽学校が一緒になって芸大になったんですが、芸大になるときには映像芸術科をつくろうとしていたんです。

　さきほどのお話にもあったように、芸術にはライバルの存在が重要だと思います。音楽と美術は「酢と油」の関係だと私は言っておりまして、学長が上手にかき混ぜて胡椒で味つけをすれば、すごく美味しいドレッシングになる（笑）。酢と油という相容れないものを比喩にもちだしたのは、音楽と美術は専門領域は違うけれど、おたがいに切磋琢磨しなくてはならないという意味です。いま大臣がおっしゃったように、つねに時代を意識して動きつづけなくてはならないわけです。

　芸大では、すでに先端芸術表現科を三年前にスタートさせています。色と形と音と光が全部そろわないと、無味乾燥になってしまう。美術と音楽は重なる部分もたくさんありますから、領域を超えて芸大はやろうと動きはじめています。

**樋口**　ところで横浜のみなとみらい地区では、いま「横浜トリエンナーレ２００１」（九月二日～十一月十一日）が開催されていますね。現代美術の最先端の動向を紹介しながら、映像・音楽・美術など複数の芸術ジャンルや科学や哲学との交流も試みる日本では初めての大規模な国際現代美術展です。私はついこのあいだベネチア・ビエンナーレから帰ってきたばかりだったんですが、さっそく観にいって、「日本はすごいな」と感激しました。

**遠山**　水は低きに流れると言いますが、私は「文化は高きに集まる」と考えています。日本にはいろいろな伝統がありますが、これからは現代的な創造的活動を活性化させて、もっと世界へ発信するべきでしょう。たとえば、さまざまな文化に関する国際会議やフェスティバルを開催していくなかで、世界中から人々が集まってくれれば、日本自体の芸術文化も高まるし、人材も集まってくるでしょう。

　そのような意味でも、私は文化発信はものすごく大事だと思います。かつて大使としてトルコにいたとき、日本の芸術作品を展示したり紹介する機会に恵まれたおかげで、トルコの人たちの日本に対する見方がたいへん変わってきたんです。その際には、洋楽、邦楽、美術など芸大の先生方には随分お世話になりました。もともとトルコの人たちは親日的なのですが、たんに経済援助をしてくれる国だと思っていたのが、ますます尊敬を得たというように感じました。文化を発信して日本の豊かな文化を認識してもらうことは、外交的にも非常に有効な手段ですし、長い目で見れば、日本の安全保障にもつながると思うのです。

**澄川**　たしかに、芸術には国境はありません。

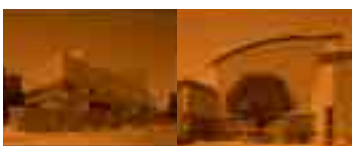
**樋口**　おっしゃるとおりですね。今年は「日本におけるイタリア年」ということで、いろいろな催しが開かれていますけれど、イタリアが長年主張してきたのは、日本からは何の作品も来ないじゃないかということです。日本の仏教美術には、世界に誇れるような作品がたくさんあるにもかかわらず、宗教上の制約があって海外に持ち出すのは非常に難しい。フランスのシラク大統領も、ぜひフランスへ持ってきてほしいとおっしゃるのは、やはり仏教美術が中心のようですね。

**遠山**　文化庁の長官をやっていましたときに、イタリア側からそういう不満の声を聞きました。それで、イタリアに持っていったのが「信仰の美四〇〇〇年」展なのです。縄文時代の火焔土器から始まり、仏像や仁王像の数々、琳派の屏風絵で終わるたいへん立派な作品ばかりの展覧会でした。今回のイタリア年の豊富な文化行事は、そのような文化交流の歴史をバックに持っていると思います。

**樋口**　土器と言えば、今年、東京国立博物館で「土器の造形――縄文の動・弥生の静」が開催されましたね。私は、心の底から圧倒されました。あ

**樋口廣太郎**
ひぐち・ひろたろう

東京芸術大学運営諮問会議議長
アサヒビール株式会社取締役相談役名誉会長
1949年京都大学経済学部卒業。
住友銀行取締役副頭取を経て、92年アサヒビール代表取締役社長に就任。
99年より財団法人新国立劇場運営財団理事長、00年より東京都現代美術館館長も務める。



**澄川喜一**
すみかわ・きいち

東京芸術大学学長
1956年東京芸術大学美術学部彫刻科卒業。58年同美術学部専攻科修了。
67年東京芸術大学美術学部講師。同助教授、同教授、同学部長を歴任。
95年より現職。

の、炎の造形のすばらしさは筆舌に尽くしがたい。

**遠山**　縄文時代に、あれだけの造形表現ができたというのは、すごいことですよね。土からあのように力強く、かつ、溌剌（はつらつ）とした造形を作り出した古代の人々の創造力とエネルギーに感服します。

**澄川**　そのころまだ、美術学校はなかったですから（笑）。いろいろご注文はあると思いますが、こんど、音楽学部が学外のご支援をいただきまして十月にロンドンで演奏をします（★2）。われわれはイタリア料理とかフランス料理ばかりを食べてきたけれど、これからは向こうの人たちに和食の良さを知ってもらう時期だと思っています。数年先には大学美術館でも大規模な交流展を開く予定です。

**遠山**　クラシック音楽演奏や彫刻というのは非常に普遍的ですね。どこに行っても理解される。でも、そのなかに、やはり日本的な何かがあるんですね。澄川先生の作品も、木のぬくもりや木のなかに込められた日本の美しさ、日本の持っている文化の美しさというものを主張しておられると思います。それがすばらしい。日本人らしさをなくして無国籍になってしまったら、おもしろくないですよ。

**澄川**　「そりのあるかたち」には、たまたまニューヨークで八年前に個展を開いたときの作品も入っていますが、当時現地の記者が、「ストライキング・スカルプチャー」と評してくれました。つまり「これこそ彫刻だ」という意味でしょうか。私自身は自分の表現が、日本的だとはまったく意識していないのに、向こうの人の目には日本人の作品として映る。作品には、滲み出ているのでしょうね。

**遠山**　「滲み出る」というのは、たいへんいい表現ですね。それが大事だと思います。最初から日本的であろうと意識する必要はないのでしょう。

## 文化は国のショーウインドーである

**遠山**　いま文化芸術創造プランとして、新しい予算要求をさせていただいております。これまでは、オペラやバレエの公演を開く場合、なかなか予算が出なかったんですが、もっと資金を補助するようにしようと考えています。おそらく、文化立国に向けての非常に大きな胎動が、二十一世紀の初めに起きると私は思っています。

たとえばフランスは、世界でも第一級の文化大国というイメージがありますが、いまのような文化国家になったのは、じつはそんなに古くないんです。ミッテラン政権のラング文化大臣が文化予算を一気に倍増してからで、以降、記念碑的建造物を次々につくったりルーブル美術館も充実させて、一気に文化立国を推進したんですね。いまフランスは、国家予算の一％を文化に使っていますが、日本は、わずか〇・一％です。

**澄川**　やっと〇・一％になったんですよね。

**樋口**　フランスといえば、いまの三倍くらいの規模でポンピドー・センターを新しく建設する計画があります。その設計コンペで、日本の安藤忠雄さんが二人のなかの一人に残っている。嬉しい、いいニュースですね。

**遠山**　予算が十分あれば、文化施設の整備や充実が日本でもできるんですよ。羨ましい話ですね。

**澄川**　フランスがうまいなと思うのは、じつは農業国なのだけれども、文化を前面に出している点です。ショーウインドーのように、国のイメージづくりに文化を使っている。

**樋口**　英国もそうですよね。

**遠山**　日本も、世界に誇り得る文化を持っているのですから、もっと積極的に発信していくための努力をしていくことが必要でしょうね。

**樋口**　日本でも、上野駅からきれいな地下道を通して国立西洋美術館や東京国立博物館、芸大に行けるようにすれば、だいぶ変わりますよ。

**澄川**　アメリカのスミソニアン研究所（★3）のようにしたらいいですね。

**樋口**　「米百俵」ですよ。やっぱりこういうときに使わなきゃいけない。

## 芸術の創り手と理解者の双方を育む

**澄川**　文化立国ということで言うと、やはり大事なのは心の教育、感性教育ですね。

**遠山**　心の教育というのは、小学校とか中学校時代、子どものときに本物に触れる感動の大事さが、本当にこれはいくら言っても言いすぎでないくらい重要です。ですから、その点も新しい文化芸術創造プランには盛り込んで、芸術の創り手を育てると同時に、芸術の良き理解者、サポーターとなる人たちを育てなければいけない。そのためにも学校での芸術教育で本物に触れさせる機会をもっと徹底的に増やそうと、予算要求しております。

**樋口**　ぜひお願いします。

**澄川**　芸大に入ってくるのは十八歳くらいからです

**★2 英国公演**
十月八日から二十日まで、東京芸大シンフォニアが、英国におけるJapan2001行事の一環として演奏旅行を行う予定であったが、米国中枢同時テロに対する米軍・英軍によるアフガニスタン攻撃が、十月八日未明に開始されたため、今回の派遣は延期となった。

**★3 スミソニアン研究所**
スミソニアン研究所は、アメリカのワシントンD.C.及びニューヨークに所在する十四の博物／美術館・国立動物公園と、多くの研究機関を網羅する複合体で、世界で一番大きな博物館群。

**★4 新学科構想**
音楽学部の学科改組により「音楽環境創造科」を新設しようとする平成十四年度概算要求事項。この新学科は、●二十一世紀に相応しい、映像表現・身体表現やIT技術と結び付いた新しい先鋭的な音楽芸術創造、●トーンマイスターなど音楽を物理的に支える人材の養成、●聴覚を通じた人間と外界の様々なスケールにおけるコミュニケーションのあり方を探ることによる、より好ましい、より人間的な音環境の創造、●地域社会における芸術文化活性化のためのネットワーク造りといった芸術文化的社会環境構築とそのための人材育成を行い、音・音楽を取り巻く物理的・社会的な環境について総合的に考察し創造すること、を目指している。

から、もっと幼年期からの感性教育が必要です。そうなると、学校で教えるだけでなく家庭での教育が欠かせませんので、親自身の感性教育も重要になってきますね。いま大臣がおっしゃった幅広い文化行政が行き届かないと、どこかでバランスが崩れたときに脆弱になってしまうかもしれません。

**遠山**　文化行政に力を入れることは、たんに芸術文化とか心だけの話ではありません。波及効果としてはたいへんなものがありますね。産業にも影響しますし、それから科学技術の先端でも機能美ということが非常に強調されます。街づくりに関わってくる部分もあります。優れた芸術作品を創造する資質を活用し、社会のあらゆる分野の文化性を高めることに、大学としても協力していただきたいと思います。

**樋口**　芸大には、全国の芸術大学と協力して推進していける領域がたくさんあるのではないかと思います。何しろ歴史が古いのですから、牽引役を務めることを期待しています。

**澄川**　おっしゃるとおり、いま私どもの大学がメディアアートの可能性や地域社会の芸術的活動について、積極的に発信しなければいけないと思います。おりにふれて私も声を大きくして積極的に発言していきます。

**遠山**　どうぞお力添えをお願いします。いまの時代、国も国民も文化の大事さに目覚めるべきなんです。国民の方がたには、まず文化を楽しんで、できれば文化活動に参加して、そして文化を支えていっていただきたいですね。国民一人ひとりの自発的活動が、社会全体を良くしていくのですから。

## 上野の山一帯を、日本文化の応接間に

**澄川**　さきほど新しい映像文化という話が出ました。芸大では、茨城県の取手キャンパスで美術学部先端芸術表現科をすでに発足させておりますが、音楽学部でも、新しい分野を積極的に展開するよう、新学科構想（★4）を申請しております。

　また、芸大は英語の名称を「ファインアーツ・アンド・ミュージック」、美術と音楽と表記していますが、今後は「アーツ」に変えていこうと思っております。さきほど申しましたように、美術と音楽だけをやっているというのでは広がりませんから、総合大学、総合芸術大学というようにしていきたい。そこで英文表記を、「アーツ」に変えようとしています。大学美術館と奏楽堂をつくっていただきましたし、美術学部全体をファクトリー・ミュージアム（★5）にしようという発想もあります。

　音楽でも、海外公演を企画したり、世界的なコンクールを芸大の奏楽堂でやろうと提案しているところです。ビエンナーレと同じですね。四、五年で実現すると思います。上野という文化ゾーンには、東京国立博物館や東京文化会館、国立西洋美術館もありますし、協力して活性化していく構想です。

**遠山**　たしかに、あれだけの文化施設がそろっている地域は他にありませんね。誰でもいつでもあの地を訪れるとさまざまな美の感動を受けることができるようになるといいですね。しかも、樹木や自然の美しさとともに施設も充実し、快適な環境で芸術文化に浸れるようでありたいものです。

**澄川**　加えて、芸大という人材養成の場もありますから。将来的には外国の方がお見えになったとき、大学美術館でおもてなしをしてもいい。要するに、日本の文化の玄関、応接間のようになれば、と思っているんです。

**樋口**　上野の山の下には、不忍池もあります。しかも皇居からも近いですしね。両陛下をはじめ、日本の皇室の方がたは非常に文化に関心が深いですからたびたびお訪ねいただいております。

**澄川**　ありがたいことです。三笠宮様がオリエント考古学をおやりで、芸大でも客員教授として、ずっと毎年ご講義を担当していただいています。高円宮様は根付の研究をされておりますね。

**樋口**　国を挙げて何か体制をつくらないと、文化国家とは言えないですね。一部の好きな人だけがやっているというのでは、まだまだだと思います。

**澄川**　そのためには、心の教育がやはり原点になりますね。

**遠山**　ええ、そうですね。新しい世紀、日本も世界の国々も数々の難問を抱えていますが、私は日本人の高い資質に信頼を置いています。これからの日本にとって経済力の回復ももちろん大事ですが、同時に芸術文化をもっと振興し、豊かな心を持った国民を育成し、国際的に見ても魅力ある国家を造っていくことが大事でしょう。

**澄川**　心というのは、偏差値とかペーパーテストの結果で線引きできるものではありません。競馬じゃないですけど、いっせいにスタートしても皆と一緒のコースを走るとはかぎらない。コースを早回りして早々とゴールインしているかもしれないし、遠回りして道草を食いながら順位ではない、いいことをやっていくかもしれない。広い意味での心の教育の一端をになうのが、われわれ芸大だと自負しております。

　今後も、ご指導をよろしくお願いします。本日は長い時間、ありがとうございました。

（二〇〇一年九月十日）

**★5 ファクトリー・ミュージアム**
一九九五年二月に美術学部でまとめられた上野キャンパス再開発計画の基本理念。各科専門教育棟群、大学美術館などを、順次、中庭を囲む形に建替えて配置し、キャンパス全体をもって美術館施設群としての機能を持たせようとするもの。この施設群では、各科専門教育棟内展示室における学生平常制作の公開展示や学生の自主企画を始めとして、制作と展示が同時に進行し、作品と社会が「現在」という場において直接に対峙し合う場となし、さらに、実技各科がその枠組みを越えて、さまざまに連携する。なお、大学美術館は、この構想に基づき建築された。

**座談会★**
**芸術教育がになう役割と課題**

インタビュー

# 教育と表現の現場から

非凡なアーティストであるとともに、優れた教育者であること――。
技術だけではなく感性、知性をも伝授することの意義と課題を、6人の教官が語る。

## 中林忠良

美術学部絵画科　油画専攻版画

### テクニックから解き放たれたとき、自由な創造が生まれる

「転位'98ー地ーII」

日本の版画は戦後飛躍的に発展し、国際画壇でも認められて、版画人口も非常に多くなってきました。油画専攻の版画研究室は、版画の専門家を育成するのが大目的ですが、版画を学びたいという学生にも門戸を開いています。現在は日本画、芸術学科、美術教育、それに本科の油画科の学生に、専門の教室で版画の基礎教育をほどこす授業をしています。

版画は、油画や日本画のような直接表現と違って間接表現なんです。実際に扱うのは木や銅という素材であって、版それ自体は表現ではない。刷ったときに、はじめて表現になる。回り道をして、遠隔操作がうまくいくことをおもしろいと感じる資質が必要になってきます。

版画は平面芸術にかぎれば、最もテクニックを必要とするジャンルです。テクニックをマスターすることによって、自分が自由になる。テクニックがまだうまくいかない段階では、技術の虜になって自由な創造を羽ばたかせるのはなかなか難しい。早くテクニックを身につければ、自分のやりたいことを歌えるようになるのです。一方、テクニックはなまじのことでは身につかない難しさをもっています。学生には、そういう版画の特性に目を開かせ、気づかせてあげたい。学校にいるあいだに、基礎的なこと、将来の足がかりはつけさせたいと願っています。

今日のように専門領域の垣根が低くなって、価値の多様化、文化の多様化を背景にした時代になると、版の世界という芸術は、いろいろなものに対応できるというキャパシティの深さが見直されてきます。日本人の美的な感覚のほかに、技術的なものに対する感覚の鋭さが多様な表現に対応できる土壌をつくっている。同時に、版画のシステマティックな方法論は、いままで版画に触れない人でも興味さえもてば、そこに身を投じて、何かしら自分の表現が実現しやすい分野でもあります。

私たちが学生のころにはまだ版画の地位が低かったせいもあって、「版画道」と言えるくらい、ほかのジャンルには目を移さないで、一筋でやってきました。それに比べると、いまの若い人たちは版画にこだわらなくても、テクニックや感性の違いで、そのときどきに選び取ったものを手がける、気負わなくてもいい状況になった。版画をやりながらまた別のタブローにいそしむとか、あるいは彫刻家が版画をやってみるとか自由になりました。

ここにきて初めて、版画に向く感性とイメージをもち技術的なものを消化できる人間が、版画の世界に自分の想像を羽ばたかせる、そういう時代になったんじゃないかと思いますね。

なかばやし・ただよし
一九三七年生まれ。六三年東京芸術大学絵画科油画専攻卒業。六五年同大学院美術研究科版画専攻を修了。七四年版画研究室講師。八九年から教授

# 三田村有純

美術学部工芸科　漆芸

## 漆器とは何かという、本質から問い掛ける

みたむら・ありすみ
一九四一年生まれ。七五年東京芸術大学大学院美術研究科漆芸専攻修了。七八年同研究生修了。九〇年助手、九四年講師、九九年から助教授

芸術大学における教育の主眼は、アーティストを育てることにあります。

なかでも工芸科は、自分の生き方やアイデンティティを、工芸素材・工芸技術を使って、どのように表現するかを追究しています。ただ、工芸分野では、自分の表現を実現するための技術的基礎を得る最低限の修練の時間が必要になってきます。そこが、ほかの美術教育とは少し違うところです。

漆の場合であれば何の素材で造形し、どうやって漆を塗るか、加飾のための蒔絵や螺鈿技法をいかに習得するかが重要になります。ひとくちに漆芸といっても多岐にわたる表現領域をもっていますので、ひとつひとつ着実にこなしていかないと、表現できません。

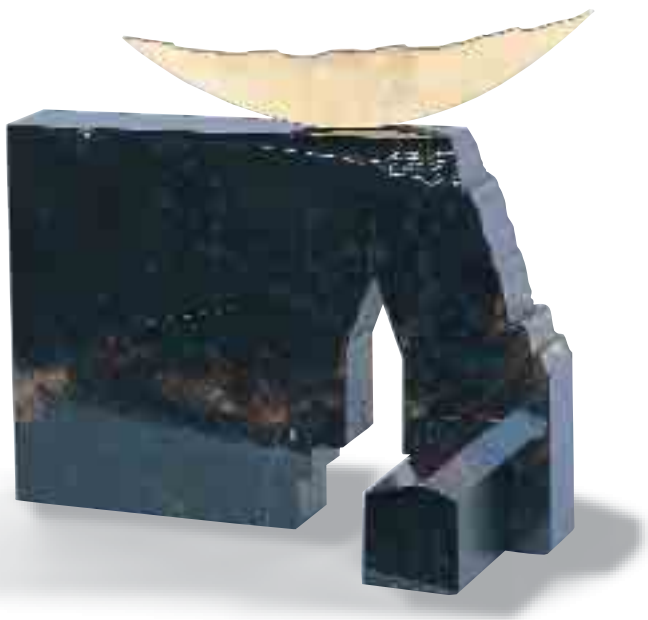
漆芸専攻は東京美術学校（美術学部の前身）創設のときからあり、しかも国立大学では芸大にしかありません。明治政府が美術学校をつくる際に、当時、ヨーロッパで認知されていた芸術領域から科目が選ばれていったのです。蒔絵の漆芸、木彫の彫刻、彫金や七宝、やまと絵の日本画……。当時、漆器は重要な輸出品でした。なぜかというと、ヨーロッパには漆がありませんので、マルコ・ポーロの『東方見聞録』の時代から、漆は、憧れの対象でした。英語の辞書を引くとchinaは磁器で、japanは漆です。ヨーロッパ人は、日本をそのように見ていたのです。漆芸は素材のみならず、デザイン・空間表現など、繊細で巧みな日本人の国民性、湿潤な風土ならではの芸術表現だといえます。

私は江戸蒔絵師の十代目で、ヨーロッパの多くの美術館に代々の作品が所蔵され、それについて問い合わせがきます。ヨーロッパの漆芸の研究者が手紙をくれたり訪ねてきたり、そういうことがきっかけで、漆をとおした国際交流を続けています。漆のないヨーロッパの国々に、漆の木を植える活動もしています。

学生には、「上手くなりなさい」という教育、繰り返し、反復させて技術を覚えこませるという教育はしていません。「お椀というのは、本質が何なのか」そこから教えます。なぜ人間にとって「お椀は必要なのだろうか。形態は、いかにあるべきだろうか」。そういった課題を、教え授けるのではなく、話し合いながら、導きだしていきます。その訓練を経ることによって、アーティストにもなれるし、指導者にもなれます。

全国の地場産業の試験場や、漆芸の科目をもつ大学で芸大の卒業生たちが教えています。なぜ、技術のスペシャリストだけではなく、芸大の出身者なのでしょうか。「漆はきれいに塗るのがいいのか、かすれていると美しいとはいえないのか」。芸大では、学生たちに大きな観点から問い掛けています。その問い掛けが、新しいものを生みだしていくと思うのです。

工芸を「用の美」といいますが、絵画や彫刻も本来は、人間の生活と密接に結びついていました。祈るという用、仕切るという用。表現は人間の生活に根ざしているはずなのです。芸術とは、人が人として必要なもの、生きるということは何かということを、表現し探していく結果生まれてくると思っています。



「月輝く処」

# 藤幡正樹

**美術学部先端芸術表現科　インターメディアアート**

## 自分の表現に適したメディウムを作るアート

芸術を教える学校は「芸術性」は教えられないという、根本的なジレンマを持っています。ある人間が社会と、どう関係を持っていけるか、あるいは関係を持てないでいるか。そういう個人の問題、個人が持っているドグマや背景が芸術表現の根本にはあります。だから「問題がない」人には教えようがない。そこで、学校が教育組織として何ができるかというと技術（スキル）になってしまう。どういうふうに絵の具を塗るとか、粘土をこねるとこういうものを作れるとか、そういうスキルを教える。そのなかでの人間性とか表現性とか価値観というのは、むしろ徒弟制度的に、一対一で先生から学び取っていくという側面がありました。

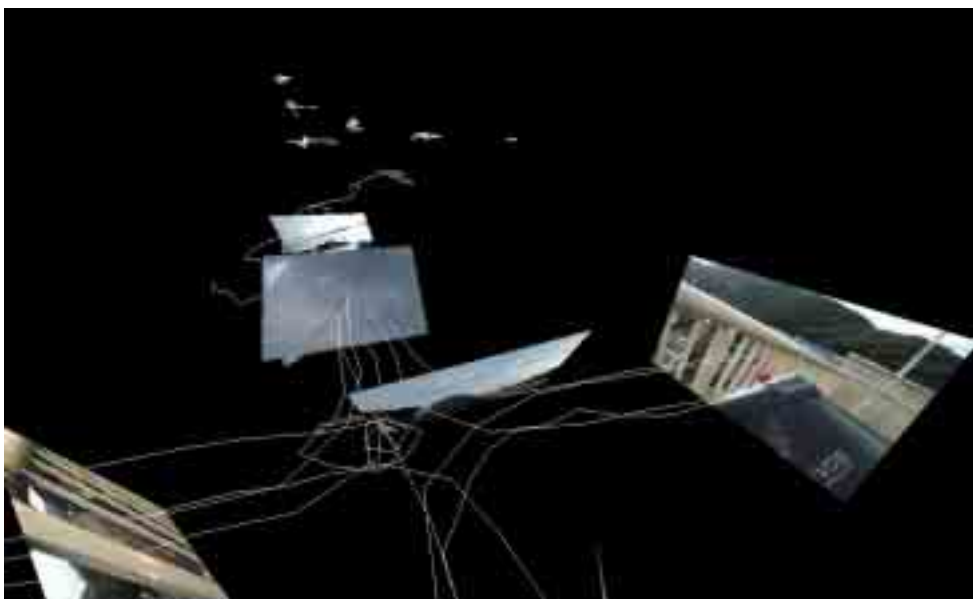
先端芸術表現科が、「表現」という言葉を使うのは、だれもが社会と関係を持つときに、自分を「表現する」という行為が絡んでこなければ、おかしいだろうということなんです。たとえば、セールスマンが商品をセールスするときに、自分の会社のほかのセールスマンと比べて、ある人が優秀だとする。それは、そのセールスマンのなかには何かを何かに変えていく、表現して関係性をつくっていく能力があるわけです。テレビにしても車にしてもカメラにしても、作ろうと思うこと自体、それはもう「表現」だし、売っていくことも含めて、ひとつの社会的な「表現」であると考えようということです。つまり、いままでの「芸術」という概念より「表現」という言葉のほうが、かなり広いと思う。「表現」をしたいと思っていても、やり方がわからない。自分の病気の原因がわからない。そういう学生に対してどういうふうに、自分の病気のもとになっているものを探し出していくか。ひとつのやり方として「表現」をさせていく。

版画や工芸では、はじめに表現の媒体があります。つまり、メディウムが先行している。先端芸術表現科はメディウムが先行していない学科なわけです。自己の中の表現欲求を優先させて、そのうえで媒体を選んでいく。

つまり、従来型の芸術教育というのはスキルとメディウムで、先端芸術表現科では表現に合ったメディウムを学んでいく。モチベーションであるとか「病気」であるとか、そういうところからスタートする。先端の場合、メディウムではなく自分の内面性を掘り下げていきつつ、何らかの表現にたどり着いていこうとしている。複数の人間がいて、組織として社会が成り立っていることを踏まえて表現を考える。マクルーハンが「メディアはメッセージである」と言ったのは、メディアの構造が違うとそれに適した表現の形態や中身も変わるってことですよね。だからメディウムそのものがメッセージだということです。

「メディア・アート」という言葉はぼくのなかでは、いわゆる「テクノロジー・アート」のことではなくて、

ふじはた・まさき
一九五六年生まれ。七九年東京芸術大学美術学部デザイン科卒業。八一年同大学院修了。九〇年慶応義塾大学環境情報学部講師。九二年助教授。九八年教授。九九年東京芸術大学美術学部先端芸術表現科教授



「Field-Work@Hayama」20000 制作：藤幡正樹　技術：川嶋岳史
GPSとビデオ、カメラとセンサーを組み合わせた新しい記録媒体を用いて作られたきわめて私的な日記を、デジタルの空間のなかで自由に見ることができるように設計された作品

要するに自分の表現に適したメディウムを作るアートのことだと理解しています。だからそういう意味で、いま先端芸術表現科がやっていることも、「メディアを作る」という意味では「メディア・アート」なんですよ。額縁やギャラリーではおさまらない。環境全部をメディアとして作り変えてしまう作業が、いまいちばん求められているのではないでしょうか。

# 山本邦山

**音楽学部邦楽科　尺八**

## 伝統への理解を踏まえて、新しいものに挑戦する

やまもと・ほうざん
一九三七年生まれ。五八年京都外国語短期大学卒業。六二年正派音楽院楽理科卒業。九九年東京芸術大学音楽学部邦楽科教授

芸大に尺八専攻ができた一九七〇年代といえば、尺八が海外に向かって大いにアピールした時代でした。以来、巣立っていった学生のなかから、プロとして成功するものが出てくるなど、活躍が目立ってきました。

「首振り三年」と言いますが、尺八では「ゆり」という、いわゆるビブラートに大きな特徴があります。「ゆり」も一種類ではなくて、「横ゆり」とか「縦ゆり」とか「廻しゆり」とか、それを混合した技法がたくさんある。オーボエやフルートにはない「ゆり」を、日本の楽器としての尺八は最も重視しています。近年の世界的な評価にも、この「ゆりの技法」というのがあるのではないかと思います。

尺八専攻では、伝統音楽を正しく演奏し、正しい知識を得てもらうよう指導しています。その上で、伝統の流れを踏まえて新しい曲に挑戦する。いまの若い人のなかには、音が出ただけでもう巧くなったような気がして、新しい曲に行ってしまうケースが多く見受けられますが、土台もなしに新しいものに挑戦するのではなく、伝統音楽のメロディ、美しさ、素朴さを、よく理解した上で次の段階に進んでもらいたい。

邦楽科には、親の奏でる音を聞いて育ってきた人が入ってきます。そういう学生には、基礎のところから改めて教えをほどこし、細かいところの手直しをすることをぼくらは義務づけられている。そういう環境以外の人は、素直に、尺八の音色に惚れて入ってくる。いまは音源がいっぱいありますので、自発的に日本音楽を好きになるのでしょう。楽器に愛情をもつ人は男女を問いませんから、優秀な女性もいます。

基本的には、一対一のレッスンです。学生たちは、芸は盗むものだと、心がけていると思います。また、定期演奏会のおりには、私は合奏には参加せずになるべく学生を離し、任せてしまう。その代わり指導のときは厳しくやる。離したほうがかえって力がついていくものです。

私の場合、ジャズ・バンドやオーケストラと共演しましたし、歌謡曲も吹いた。表現ということでは、邦楽のアンサンブルとは違ったおもしろさがありました。自分はこの音楽以外やらないという音楽家もいると思いますが、失敗してもともとですし、その代わりずいぶんと、努力して勉強しましたから。演奏するだけではなく、いろいろな音楽を聴く耳をもち、だれがこういう表現をしているかと、いいものをチェックする。邦楽以外の、協奏曲や交響曲でも、好きなタイトルの曲の自分で感動した部分を忘れないでいると、自分の演奏に現れてくるかもしれないと、学生には教えています。

# 野平一郎

音楽学部楽理科　ソルフェージュ・作曲

## 好奇心と応用力によって、自分の演奏を打ち立てる

のだいら・いちろう
一九五三年生まれ。七六年東京芸術大学音楽学部作曲科卒業。七八年同大学院音楽研究科修士課程修了。八二年パリ国立高等音楽院卒業。九〇年東京芸術大学音楽学部ソルフェージュ科助教授

芸術教育の上で、もっとも気をつけているのは、学生各々の資質を見抜くことです。大学に入るまで経てきた環境によって、彼らが受けてきた基礎教育は個別的なのです。病院の患者のカルテのように一人ひとり問題点が違う。私が教えるソルフェージュは、音楽家になる学生のために基礎訓練をほどこすわけですが、人によって個別の問題があり、授業で同じカリキュラムを課してもしかたがない。そういう苦労があります。

私は二十五歳のときフランスに留学して、パリの国立音楽院でかつて芸大の教官でもあった、ピアニストのアンリエット・ピュイグ＝ロジェに習いました。

一週間に三回、朝の九時から授業がある。よほど興味があって自分のためになると思えないと、通いつづけられませんよね。一年間、毎週、学ぶのがほんとに楽しくて刺激になった。そんな経験ははじめてのことでした。音楽にダイレクトに触れさせ、人を変える力をもっている。自分も、刺激的で、そこに行くのが楽しいと学生に思われるような授業にしたい。

ソルフェージュの範囲内で、好奇心を掻き立てる。創作でも演奏でも、芸術において、教えられたことをそのままやるというのは無意味ですから、学生に起爆剤を与えて、自身の力でやらせるように後押しをする。西洋医学のように薬を与えて治癒させるのではなくて、整体のように、人間が本来もっている治癒力を発揮させることによって、自分で病気を治す。潜在的に眠っているものを目覚めさせたい。音楽家としての進路でさえ、未知数かもしれないし、自分から創造しないとなんにも起こらない。そういう力を引き出してやるというのが芸術大学の教官の使命ではないでしょうか。

音楽の基礎訓練というのは、具体的にさまざまなものごとを知り、応用力をつけるということです。たとえば、教官が学生が作曲した曲を、バランスが悪いと指摘したら、その根底に原因があるわけです。その根底の原因を知りさえすれば応用が利く。その曲のその場所の問題で終わらないで、ほかの曲の場合にもその指摘を応用できるわけです。

音楽において、自分ひとりの力とバックグラウンドで、インタープリテーション（演奏解釈）に到達し、自分の演奏を打ち立てる。これは、好奇心が育っていないと容易ではありません。そのために必要な知識は膨大にある。たとえば、ある作曲家の楽曲を理解しようとするとき、音楽の楽譜だけを見てもわからない。つまり作曲家が音を書く場合、背後に思想やどんなイメージを描いているかといった、さまざまな要因がある。その上でそれぞれの人がどう料理するかを踏まえて自分なりにこういう表現をしたいと考えが深まってくれれば、強固な演奏解釈ができるわけです。

大学は、芸術を学ぶうえでの、人間関係をつくる場所という機能もっています。学生のあいだでも、人間のネットワークをつくり、他人がやっていることを知る。つまり人と人が会うだけでは出会いにはなりません。ある人がある人に何かモーションを起こさせる。行動を起こさせられることによって、自分に足りなかったことを知るわけです。そうするとその人は変わる。変わるとこまでいってはじめて出会いといえるでしょう。

# 實相寺昭雄

演奏芸術センター長

## 奏楽堂から発信する「共同作業」の成果

演奏芸術センターは舞台芸術、パフォーミングを含めた演奏芸術、それをもとにした講義、奏楽堂のホールを利用した企画・推進をおこなう、音楽学部と美術学部にまたがる機関です。

十月公演のオペラ定期「ドン・ジョヴァンニ」でも、美術学部にかなり大きな協力を仰いでいます。協力し合えるところはいっぱいありますから、共同作業を日常化させたいなと思いますけどね。今回の美術学部の協力は、出道具や小道具などの造形ですが、プログラムの表紙、ポスター、チラシなども、美術学部の先生方に多くを負っています。これからは、たとえば背景画が欲しいとか、いろいろなケースが出てくるのではないでしょうか。空間そのものをどう生かすかということでも、美術学部との共同作業でいろいろな知恵を借りなければだめだと思っています。これは、ほかの大学ではできないことですからね。

芸術教育について、ぼくが理想とするのは「寺子屋」です。スタッフを教育するには、ある期間をかけて一緒に仕事をしていきながらそのなかで教えていくと、うまくいく。教壇があって、みんな椅子に座っていて、マスに対してある理論や思想を教えていく「座学」っていうのは、ぼくには向いていない。実践を積み上げながら教えたり教えられたりする。実際的なことしかできないですね。映像の世界でも、ずっとその方法でスタッフを育ててきましたから。

総合芸術としてのオペラを学ぶには、東京芸術大学は最適の場所です。たとえば、オペラ歌手を育てるのは、たいへん贅沢なことなのです。歌手が一人で歌うというわけにはいかない。ぼくらみたいに動きを考えたりするスタッフがいて、指揮の先生もいる。相手役にもしっかりとした先生がいないといけない。ある場合にはオーケストラが必要になってくる。明かりや道具や衣装を準備する人がいる。そういう環境が備わってはじめて一人の歌手を育てていく。芸大は環境が整っている部分で、学生にもたいへんメリットがあるんじゃないですか。しかも美術学部もある。だからもっとそのメリットを生かさなければと思っています。

ただ、最近の学生は、ますます「洋魂洋才」になっていますね。着物が着られない、下駄を履いて歩く気持ち良さもわからない。言葉の問題も非常に大きいと思います。この上、国際化ばかり唱えていると、とんでもないことになってしまう。オペラという西洋音楽をやる場合でも、歌舞伎の知識や所作事、それに礼儀が必要。襖の開け閉めでも、舞台の上に出さなくても心得ているほうがいい。

芸大の音楽学部には日本の古典芸術・芸能がありますが、核として、日本の演劇を含めた古典芸術についてのカリキュラムを充実させる必要がある。それはぼくの期待です。奏楽堂というパフォーマンスする場所ができたから、もっと共同作業をしていきたいと思いますね。

芸大にいるいろんな才能をもった先生方が発信するもの、学生たちが発信するものを、奏楽堂を使ってどうやっていちばん有効に世の中に発信していくか。それが、いまのぼくに与えられている使命だと思っています。

じっそうじ・あきお
一九三七年生まれ。五九年早稲田大学第二文学部仏文学専修卒業。九七年東京芸術大学音楽学部教授。同年演奏芸術センター教授。〇一年四月から同センター長

奏楽堂開館記念オペラ「魔笛」（写真：木之下晃）

# た芸大

**第1回** 1901年～1910年

芸大の歴史はドラマに満ちている。歴史上の名だたる芸術家たちがこの大学を舞台に興味深いエピソードを残してきた。
10年刻みで振り返る、芸大の20世紀

## 東京美術学校1903年秋

# 「第一回美術祭」の熱気と混沌


**佐藤道信**

日本近代美術史。主要著書『〈日本美術〉誕生ー近代日本の「ことば」と戦略』『明治国家と近代美術ー美の政治学』


1903

今でも毎年九月に芸術祭が開かれているが、そのルーツというならこの第一回美術祭だろう。東京美術学校の創立十五周年を記念したこの美術祭は、学生も教官も参加した全校あげてのお祭りだった。たった一日（十一月三日）のお祭りに三万人以上の入場者、侯爵や前文相まで来たらしいから、今の大型企画展もマッ青だ。凝った校内装飾とモニュメント、朝から晩まで二十六も組まれた学生の余興、菓子屋から酒屋・西洋料理店、板谷波山の記念楽焼店まで並んだ出店。さらに悲母観音など重文クラスの作品までズラリと並べた遺蹟展覧会、帰国したばかりの河口慧海のチベットコレクションを引っぱり出した西蔵品展覧会、等々。この狭い校内でどうやってやったのか、どこからそんなお金が出たのか不思議なくらい、ノリノリのハジケっぷりだ。

学生の余興は、学科やクラブごとの仮装行列と寸劇が中心だった。凱旋行列（日本画）、天象行列（西洋画）、参内行列（彫刻）、神代行列（鋳金）、江戸の花（漆工）、地獄の宿替（図案）、巴里美術学生行列（仏語）、フロレンス行列（英語）、羅馬の武士（柔道・撃剣）など、練りに練った余興が続き、最後は学生・教員なかよく全校行列している。また各学科は祭壇を作り、それぞれの祭神をまつった。祭神は、日本画科が狩野芳崖、西洋画・ラファエロ、彫刻・野見宿禰、図案・尾形光琳、彫金・後藤祐乗、鍛金・石凝姥命、漆工・本阿弥光悦。今ではよくわからないものもあるが、当時をしのばせてどれも面白い。そして各祭神の作品やその関連資料を展示したのが遺蹟展覧会で、百十件以上が校内の三室に展示された。学内所蔵品だけでなく、借用先には名だたる名士の名前が並んでいるのに驚く。学生、教官、祭神、名士、見学庶民と、人の上下も過去・現在も問わないまさにお祭りだ。お祭りとは本来こうしたものかもしれない。また校内の木々には、それぞれひねった名前がつけられた。「考え杉」「眉に椿」「ひまっ柿」「馬鹿馬鹿椎」「有難く」「やり栗」「来賓を松」「気を紅葉」「思いの竹」、叢にも「此辺お笑ひ草多し」など、若々しいオヤジギャグの連発だ。教官がつけたのなら、よほど頭が柔らかい。

今からちょうど一世紀前、前年には日英同盟の締結、次の年は日露戦争があった年のことだ。しかし高揚する時代の気分を反映しつつも、キナ臭さはここにない。むしろ草創期の熱気が燃え立っている。五年前の美校騒動も、草創期らしい熱気のぶつかり合いだったが、モメても結構サッパリしているのが、この学校の気風らしい。第一回美術祭と銘うって次がなかったのも、何となくこうしくて悪くない。ノッたら強い芸術家たちの学校だ。二十一世紀を迎え、大学も大きな転換期にさしかかった今、どんな新世紀の草創期になるのか期待しながら、ここまで来た道をたどってみることにしたい。

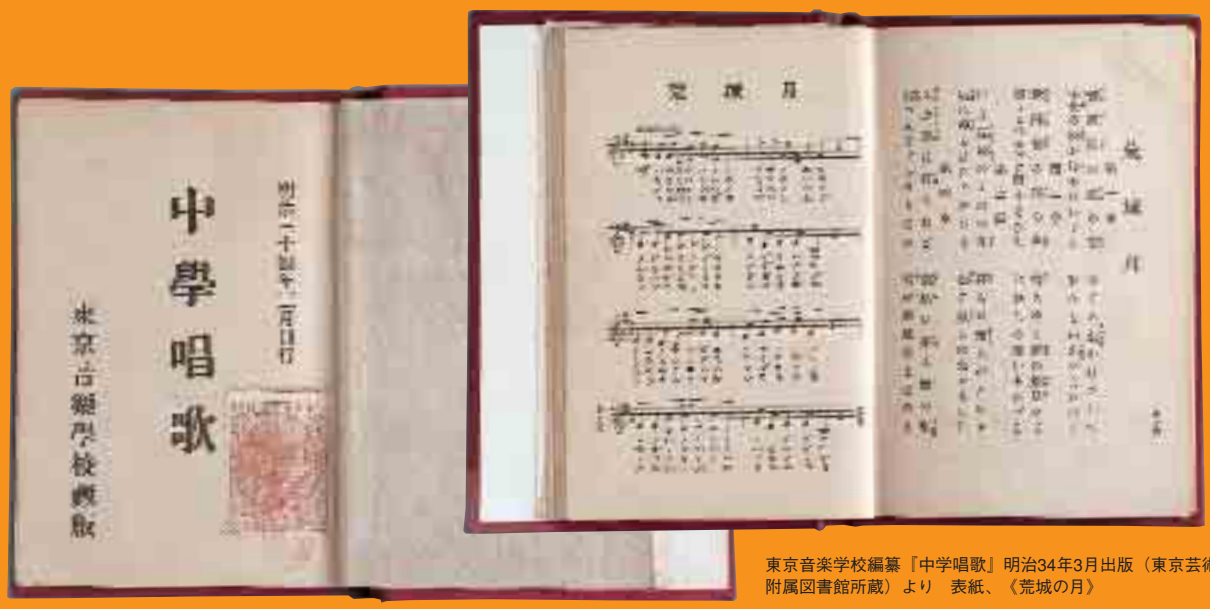
（さとう・どうしん／美術学部芸術学科助教授）

西洋画陳列場。中央上段の像はラファエロ（モザイク製）

活人蒔絵　漆工科会員

彫刻科研究生によってつくられた本館前の美神像
3点とも東京美術学校校友会編『美術祭記念帖』（東京芸術大学附属図書館所蔵）より

# タイムカプセルに乗っ




東京音楽学校編纂『中学唱歌』明治34年3月出版（東京芸術大学附属図書館所蔵）より　表紙、《荒城の月》

## 東京音楽学校1901年秋

# 瀧廉太郎の留学


**瀧井敬子**

音楽学（ドイツ・ロマン派、および日本洋楽草創期の研究）。主要論文「幸田露伴と音楽、そして妹の延」「東西音楽の接点ー音楽におけるジャポニスムの一断面」


今から百年前の一九〇一年（明治三十四年）十月一日、瀧廉太郎がライプツィヒ音楽院の入学試験に合格した。このニュースに、東京音楽学校関係者たちの喜びは並々ではなかった。我が国初めての男子留学生が、ヨーロッパの名門校にめでたく入学を許されたからである。ちょうど、女の子ばかり生まれて、ああ次は嫡子の男の子であって欲しい、と願っている家庭に、ついに待望の男子が誕生したようであった。

島崎藤村も音楽畑のみ女性が目立って元気に活躍することに、ある種の奇異を感じていた一人である。当時、洋楽は「近代」の象徴ともみなされていたので、藤村は好奇心も手伝って、一八九七年秋から一年間、選科生として東京音楽学校に在籍し、ヴァイオリンやピアノなどを学んだ。有名な『若菜集』を出版したばかりで、新進の詩人として世の注目を浴びていた頃である。彼のピアノの先生は、二十五歳の助教授、橘糸重であった。さらにこの時二十七歳の留学帰りの教授、幸田延が元気溌剌、いわばスター的に活躍していた。選科生の藤村は新聞の音楽批評において優雅な文章で、「西の國の文學も、繪畫も宗教も、哲學も、多くは皆な男子の手によりて傳へられたるに、ひとり音樂のみは女性によりて傳られたるは奇ならずや」と書いている。

幸田露伴の妹、幸田延が留学するに至ったのには、御雇外国人教師ルードルフ・ディットリヒの意見が大きく作用していた。一八八八年、ウィーンからやってきた音楽家ディットリヒは高い識見をもっていて、文部大臣の森有礼や音楽学校関係者に対して、これからは外国人を招くだけでなく、優秀な日本人を本場へ留学させるべきだと進言した。これが容れられて、一八八九年春、幸田延は官費による初の音楽留学生として欧米に出発した。

だが、彼女の六年半におよぶ不在中、音楽学校は存続か廃止かの論争が帝国議会で起こるほど、国の教育方針は揺らいだ。一八九三年秋、「高等師範學校附属」という、いわば格下げを余儀なくされ、その時代が五年半ほど続いた。もちろん、留学生の派遣どころではない。ところが、「国民の道徳を維持し品位を高める為」、高い音楽教育を施す上で東京音楽学校は必要とされて、一八九九年春、再び独立を勝ち得た。そして、十年ぶりの二人目の留学生として延の妹、幸田幸が選ばれた。しかし、ジャーナリズムはこの選考に延の介入があったと非難した。幸田幸のヴァイオリンの卓越した実力を認めながらも、男子留学生を期待する人々が多かったからである。

こうして三人目の留学生に瀧廉太郎が決定し、彼はバッハやメンデルスゾーンゆかりの町ライプツィヒへと旅立った。瀧にはピアノの腕を磨くだけでなく、高度な作曲の勉強も期待された。瀧はすでに『中学唱歌』に大きな功績を挙げていて、いつか彼こそ、西洋の大作曲家に伍するような、洋楽の本格的「作曲家」になれるのではないか――そんなメルヘン的な夢を、音楽関係者に抱かせたからである。

（たきい・けいこ／演奏芸術センター助手）

1901

# 開かれた大学

## 公開講座が果たしてきた役割

芸大の教育活動のひとつに、一般市民を対象とした〈公開講座〉がある。平成十三年度公開講座から四つの講座について担当教官が紹介する

### 夏期公開講座とは

東京芸術大学は、教官・学生の作品の公開展示、公開演奏会、大学美術館収蔵品の公開、科目等履修生の受け入れ、年末の「メサイア」、「台東第九」公演など、さまざまな形で社会と連携した活動を行っています。

そのなかでも「大学が持っている総合的・専門的教育研究の機能を広く社会に開放し、地域住民等に対して広く生活上、職業上の知識、技術及び一般教養を身に付ける機会を提供すること」を目的として、地域における生涯学習の場を提供する「公開講座」が代表的なものです。本学の公開講座は、一九八三年（昭和五十八年）に開始されましたが、実技指導を中心として一講座あたりの受講生を少なくし、きめ細かな指導を行うことに特徴があり、概ね連続三日間ないし七日間にわたり開講して、短期間に学習の成果が上がるように企画されています。

また、講座は、アトリエ、演奏ホールを使って実施するため、本学の授業に支障のないよう、主に夏休み期間に行っています。今年度は二十講座、定員八百八十六名に拡充され行われました。来年度の受講要項は、五月下旬に配布されます。

## 浮遊する造形（モビール）

伊藤隆道教官

モビールは、風の流れに応じて軽快に動く、ユニークな造形表現です。

スタティックなオブジェ作品とは違って、「風を見せる」「動きを楽しませる」というオリジナルの魅力があります。それは、立体彫刻にバレエやダンスのような「時間」の要素を取り入れた表現だと喩えることもできるでしょう。

七日間の講座では、まずモビールの代表的な作家アレキサンダー・カルダーと私の作品を紹介しながら、モビールの歴史、具体的な仕組みなどを概説します。

このあと受講者が最初に手がけるのは、モビールの原型「やじろべえ」の作り方です。ここで「動く造形」の基礎であり、最も重要なバランスについて理解していただきます。さらに、主要な素材である針金の特性、ジョイントの工夫などから、「軽さ」「重力に対する否定」といったモビール作成のポイントがおさえられていきます。

## 住民のための建築学校

片山和俊教官

芸大上野キャンパスに隣接する谷中（やなか）・根津（ねづ）・千駄木（せんだぎ）地区（略して谷根千（やねせん））は、歴史のある町並みと下町的な暮しを残す、東京の代表的な散策エリアのひとつです。

このエリアには、古くからの民家、学校、商店街が軒を接し、墓地を擁する寺町が控え、人間にとっての「生老病死」がそろっています。地勢的にも起伏に富み、町を歩いて学ぶにはうってつけの場所だといえるでしょう。もちろん、芸大の膝元だという利点もあります。私の環境設計研究室では、入ってきた大学院生には、まず谷根千を対象に計画を立てさせているんです。

この講座の大きな狙いは、町をフィールドワークすることによって、ふだんは距離のある〈都市〉や〈建築〉を身近な問題として考える手がかりを習得していただければというところにあります。受講者は、数人づつのグループに分かれて、サポーター（研究室の助手や大学院

## 指揮法講座

佐藤功太郎教官

「いちどはオーケストラを指揮してみたい」。そんな夢をもつ音楽ファンは少なくないでしょう。

芸大の「指揮法講座」では、三日間という短い時間のなかで、指揮をするさいに必要な基本的な技術や姿勢について学ぶことができます。そこでこの講座では、まず指揮特有の「生理的な部分」と「物理的な部分」について知っていただくことから始めています。

生理的な部分とは、指揮される側の目の生理、目の癖のことです。「動いている両方の手を、同時には追うことはできない」「二つの動きの中で、より大きく動いているほうを見る」……。これらを踏まえておくと、演奏者にとって見やすく棒を振ることができるようになります。

指揮の物理的な側面は、日常的な小道具を使って説明しました。釘を打つ要領で小型の金槌を振ることにより、指揮棒は、先端の動きで指

## オルガンを知ろう

廣野嗣雄教官

荘厳華麗な音色の美しさで、幅広いファンを獲得しているオルガンの響き。

公開講座「オルガンを知ろう」では、オルガンの原理、音色、演奏と歴史について、芸大にある三台の種類が異なるオルガンを使って授業を進めました。理論はもちろん重視しましたが、「見る」「聞く」「触れる」という感覚的な要素を入り口に、オルガン音楽がより身近になるよう工夫したつもりです。

奏楽堂での講義では、スライドとビデオカメラにより、プロジェクターで映像を大スクリーンに投影して進めました。オルガンの内部にカメラを入れて構造を説明し、手足を使った鍵（キ）操作を見ていただくなど、ふだんは見ることができない演奏の細部が、明らかになったと思います。

何よりも豊かな響きを聴いていただくことが、オルガンの魅力を知る最大の近道です。代表的音色を紹介したのち、「オルガン音楽めぐり」

この講座では、風力で動くモビールだけではなく、「動く造形」の枠のなかで、モーターで動く彫刻も手ほどきしました。モビールのランダムな動きや、電動による繰り返しの動きなど、それぞれに個性の違いや、おもしろさがあります。

講座最終の自由制作には、それまでに学んだ「動く造形」の中から、受講者がいちばん作りたいものを、好きな材料を自分で選んで作るという課題を与えました。材料を選ぶというのも表現行為のひとつなのです。なかには、子どもと海で遊んだとき拾ってきた貝殻を用いた女性受講者もいました。

何よりも作品をたくさん作ることで、素材を使いこなして、生き生きとした表現力ができるようになります。じつを言うと、針金自体が、初心者が取り組んでも、味わいのある表情を持ち得、完成度が出てくる素材なのです。この点も、一般の方向けの公開講座にはふさわしいのかもしれません。作品を家庭に持ち帰り、テクニックをみんなと共有することができるのも、この講座ならではのことだと思います。

（いとう・たかみち／美術学部デザイン科教授）

「光や影や曲線について今まで見逃していたことばかりで刺激的でした」「道具が少なくペンチとハリガネだけでできることが良かったです。」（「公開講座アンケート」より。以下同）

生）のガイドにしたがい行動します。このように、講義形式ではなく、受講者自身が街を見て回り、考え、話し合い、発表する「参加型」であることも大きな特色です。

今回、皆さんにやっていただいたテーマは「開く―閉じる」です。街や家がどのように「開かれ」「閉じられ」ているか、谷根千を巡りながら、その関係を発見してもらうのが課題です。また、ほかにどのようなテーマや見方を加えると、街の構造の理解が助けられるか。カメラや地図を駆使して、数時間歩き、最終日にはプレゼンテーション・パネルをグループごとにまとめ、発表してもらいます。

この講座は院生や助手も、一般の方と接することにより、頭を柔軟にして、グループワークを補助する必要が生じ、勉強になります。受講後に、自分が住んでいる町をはじめ、景観や町並み保存についての意識が高まっていただけるとありがたいです。

創作にかかわる具体的なテクニックが学べるわけではありませんが、「町と建築の見方を変える」視点を学ぶ「住民のための建築学校」は、芸大公開講座の中でも個性的なものだといえるでしょう。

（かたやま・かずとし／美術学部建築科教授）

「〈開く―閉じる〉から何を連想し、何を探そうか、とても楽しみでした。次から次へいろいろなことが連想され、まとめられない程でとても良いテーマだと思いました。」

示するのだと学んでいただく。うちわを振って空気抵抗を味わうことで、滑らかなレガートの振り方が体感できます。ビート（拍）の基本である振り子の原理を観察するのには、糸で吊るした五十円硬貨を使いました。

指揮者の心構えとして最も重要なのは決断力と実行力です。

拍子をとるなかで一斉に手を叩かせる「手叩きゲーム」や、指揮台の上から大きな身振りと手振りで、自分が思っていることを明確に伝える「ジェスチャーゲーム」など、ゲーム形式で楽しみながら理解していただけるよう工夫しました。

基礎を学んだあとは、実践へ。合唱曲を指揮するだけではなく、合唱する側にも入って、コミュニケーションの難しさを実感することはたいへん重要です。また、芸大生による弦楽合奏で、モーツァルトの「アイネ・クライネ・ナハトムジーク」を指揮する機会も与えられます。

ただ指揮者にとって何よりも必要なことは、音楽を自分のなかに充満させておくことです。基礎を踏まえ、内発的な表現意欲があれば、指揮をはじめるのに年齢は問いませんから。

（さとう・こうたろう／音楽学部指揮科教授）

「希望次第でどんどん振らせてもらえるところが魅力。」「毎日練習して、また次回参加しようと思います。上達するかなあー？」

と題して、一日目には、十四世紀の作曲者不詳の作品からバロックの巨匠J・S・バッハまでを、二日目には、ロマン派のメンデルスゾーンから現代のメシアンまでを、解説をはさみながら、院生の演奏で聴いていただきました。

また、受講者にとっていちばんの楽しみは、じっさいに自分の手でオルガンに触れ、音を出してホールに響きわたらすことができることでしょう。とくに奏楽堂のオルガンに触れられるのは貴重な経験だと思います。

講座の意義としてもうひとつ強調しておきたいのは、演奏のプロをめざす学生・院生が、アーティストとしてだけではなく、社会に目を向け、企画する側の役割を意識するということです。オルガン専攻大学院の授業の一環として、教官と院生が自由に意見を交えながら、準備に数ヶ月かけ、一般の方を飽きさせず、しかも手際よく講義を進めることに配慮しました。同時に、東京芸大における教育の現場に接していただくことも重要だと考えました。

この講座をとおして、二千年以上の歴史をもつオルガンへの関心が高まり、芸術大学奏楽堂のみならず、各地のコンサートホールに足を運んでいただけるようになると何よりです。

（ひろの・つぐお／音楽学部器楽科教授）

「奏楽堂のオルガンがあまりにも立派だったので仰天しました。パイプオルガンは、奥が深くて、いろいろな背景のもとに、成り立っていることを痛感しました。」

# 平成13年度公開講座

## 上野キャンパス

**【陶芸（陶土で楽しむ）】**
5月19日、26日、6月2日。3日間、計18時間
陶土を使い手びねり、紐作り等の技法で器を成形し、素焼きした後、下絵の具（呉須・弁柄）による絵付けと釉掛けを行い、湯呑、花器などの器物を制作する。
**講師：島田文雄　他**

**【浮遊する造形（モビール）】**
7月23日～7月31日。7日間、計42時間
モビールの基本となるシステムや手法を学び、参加者それぞれの発想やデザインによるオリジナル作品を作る。
**講師：伊藤隆道　他3名**

**【今日の美術入門】**
7月24日～7月31日。7日間、計42時間
ごく身近な「物」を素材として、立体作品を制作し、さらにフォトグラムという写真技法を利用して平面作品を制作する。
**講師：坂口寛敏　他7名**

**【油画】**
7月24日～7月31日。7日間、計42時間
室内空間に置かれた人体と静物を組み合わせ、一枚の油彩画を完成させる。
**講師：絹谷幸二　他6名**

**【木版画】**
7月24日～7月31日。7日間、計42時間
水性多色摺り浮世絵伝統木版技術の習得と制作及び版画の基本の解説を中心とした講義を行う。
**講師：野田哲也　他3名**

**【リトグラフ】**
7月24日～7月31日。7日間、計42時間
リトグラフの初歩的技術を修得させる。制作実習を中心とし、そのつど、リトグラフについての概説、歴史の説明、参考作品鑑賞等を行う。

左:【油画】　右:【リトグラフ】

**講師：木戸　均　他2名**

**【イラストレーション技法とカレンダー】**
7月23日～7月31日。7日間、計42時間
いろいろなイラスト技法により、カレンダーのためのイラストレーションを描き、完成させる。
**講師：箕浦昇一　他4名**

**【みんなで作る工作】**
7月26日～8月1日。6日間、計24時間
大人と子供が木を中心とした素材で共同制作をし、作品を完成させる。制作実習を通していろいろな道具の使い方等も体得する。
**講師：本郷　寛　他4名**

**【住民のための建築学校】**
7月27日～7月29日。3日間、計18時間
東京の下町谷中・根津地域でのフィールドワークを中心に建築や町並み、人々の生活に触れながら身近な都市景観への提案を試みる。
**講師：片山和俊　他3名**

**【お箏を楽しく－Ⅱ】**
7月20日～7月22日。3日間、計18時間
中学生以上の一般の方に箏の音楽を理解していただき、実習しながら、これらの表現を会得する。
**講師：増渕任一朗　他6名**

**【オルガンを知ろう】**
7月21日～7月22日。2日間、計10時間
2000年以上の歴史を持つオルガン。その仕組み、音色、楽器や音楽の歴史などを、わかりやすく解説し、楽器にも触れてみる。
**講師：廣野嗣雄　他**

**【指揮法講座】**
7月23日～7月25日。3日間、計18時間
姿勢、指揮棒の持ち方等の基礎的要素から、主として実技を中心に講義を進め、様々な演奏形態の楽曲の指揮入門まで、講義を行う。
**講師：佐藤功太郎　他1名**

**【初歩の尺八実技】**
7月25日、7月30日、8月17日。3日間、計18時間
尺八の歴史、琴古流・都山流の流派の違いを説明し、尺八実技指導を行う。
**講師：山本泰正　他2名**

**【春の海を弾こう】**
7月26日～7月28日。3日間、計21時間
「さくら」「春の海」を弾きます。

左:【チントンシャンってどう弾くの?】
右:【時代はUP感覚！　PARTⅢ】

**講師：安藤政輝　他2名**

**【時代はUP感覚！　PARTⅢ】**
8月1日～8月3日。3日間、計18時間
日常の無意識な動作、所作にかくされたリズム感の本質に気づき、自然な動きのエネルギーの方向を感知する。
**講師：有賀誠門**

**【お能ってなあに？】**
8月21日～8月23日。3日間、計18時間
能装束の紹介、着装、能面、宝生流・観世流による表現様式の比較による流儀の違いについての講義や、囃子事の実演と体験を行う。
**講師：野村四郎　他4名**

**【チントンシャンってどう弾くの？】**
8月27日～8月29日。3日間、計18時間
三味線音楽についての歴史編・楽器編の講義及び三味線実習を行う。
**講師：藤原睦子　他2名**

## 取手キャンパス

**【木工芸：フォトフレーム(木製額縁)の制作】**
6月9日～7月7日。9日間。
フォトフレーム（木製額縁）の制作を行う。
**講師：田中一幸　他4名**

**【新しい美術の楽しみ方】**
9月17日～9月25日。7日間、計42時間
ドローイング他、カメラやビデオなどで記録したり、個人個人で表現の可能性を探り、新しい美術の楽しみ方の演習を行う。
**講師：保科豊巳　他6名**

**【有線七宝と彫金】**
9月17日～9月26日。7日間、計42時間
七宝・彫金技法による額絵、器物等の制作。初心者は小額絵（ハガキサイズ）を制作する。

## 受講方法等について

**公開講座は、概ね次のスケジュールにより、行っています。**

| | |
|---|---|
| **5月下旬** | **公開講座実施要項の配布と大学ホームページへの掲載** |
| **6月中旬** | **受講者募集（募集期間は10日間）** |
| **6月下旬** | **郵便による受講決定者への通知** |
| **6月下旬～9月** | **公開講座の開講** |

**●受講対象者**
・受講対象者は、受講する講座の全期間を受講できる方に限ります。（例：3日間の講座を1日だけ受講することはできません）
・受講を申し込まれる方の「学歴」「経験の有無」「性別」は問いません。ただし、講座により、受講対象となる年齢が設けられる場合があります。

**●受講定員**
・受講定員は、各講座ごとに定められています。定員を超えた講座については、抽選となります。
・なお、受講の申し込みが定員に満たない講座については、申し込み期間終了後も、講座開始の10日前まで申し込みを受け付けますので、大学に電話で照会していただくか、大学ホームページでご確認ください。

東京芸術大学ホームページ　http://www.geidai.ac.jp

**●実施場所**
・**上野キャンパス**
**〒110-8714　東京都台東区上野公園12-8**
・**取手キャンパス**
**〒302-0001　茨城県取手市小文間5000番地**
**東京芸術大学取手校地**

**●お問い合わせ先**
総務課企画調査係
電話：03-5685-7508　　FAX：03-5685-7760

**●申し込み方法**
・公開講座の申し込みは、5月下旬に発行する「公開講座実施要項」巻末の申し込み用紙に必要事項を記入の上、返信用封筒を同封し、大学宛に郵送願います。
・「実施要項」は、直接、大学（上野キャンパスまたは取手キャンパス）で入手されるか、電話でご請求ください。また、大学ホームページにも掲載しますので、印刷してお使いください。
・講習料及び教材費は、受講決定通知により納入方法、納入期日についてご案内いたします。なお、抽選を行った場合、抽選に漏れた方には、その旨、通知いたします。
・お一人で、1講座に何通も申し込まれた場合、申し込みは無効となります。
・お一人で日程の重なる講座に、複数申し込まれた場合、申し込みは無効となります。
・お申し込み者以外の方の受講はできません。
・その他、申し込み方法、講習料等について、詳しくは、上記「お問い合わせ先」まで、ご連絡ください。

# NEWS 2001.4～10

## 交流

### ◆ソウル大学校音楽大学と芸術国際交流協定を締結

四月二十四日、ソウル大学校音楽大学から金旻学長、金炯培副学長、李誠載名誉教授、本学からは澄川学長、伊藤副学長、高橋音楽学部長が出席し、本学において芸術国際交流協定の調印式が行われた。

ソウル大学校音楽大学は、創立当初より韓国の音楽教育機関の中でも有数の名門校で、ソウル大学校芸術大学音楽学部が一九五三年の大学組織再編により、声楽科・作曲科・器楽科・韓国音楽科の四学科七講座を有する音楽大学となり、現在に至っている。

なお、今回の調印により、本学の交流協定締結校（大学姉妹校）は、八ヶ国十二大学となった。

### ◆皇太子殿下が大学美術館「よみがえる日本画」展を鑑賞

六月四日、皇太子殿下が大学美術館で公開中の「よみがえる日本画」展を鑑賞された。

殿下は、澄川学長の案内で工藤文部科学省高等教育局長、海老沢ＮＨＫ会長、内林ＮＨＫプロモーション社長の出迎えを受けられた後、文化財保存学の田渕教授の解説で法隆寺金堂外陣壁画の阿弥陀浄土図（模写）や横山大観が模写した牧谿作「観音猿鶴図」、狩野芳崖作「悲母観音」などを鑑賞された。

### ◆ポーランド共和国文化・国家遺産大臣一行が本学を表敬訪問

八月三十日、ポーランド共和国アンジェイ・ジェリンスキ文化・国家遺産大臣、イェジ・ポミャノフスキ駐日大使、ミロスワフ・ウッチコ文化担当書記官一行が来学し、澄川学長・永井事務局長・古嶋音楽学部教授ら大学関係者と懇談した。

これは、一九九九年（平成十一年）四月から二年間、客員教授（外国人教師）としてピアノ実技授業を担当される他、ショパン没後百五十周年を記念して奏楽堂において全十二回に渡り開催した「二〇〇〇年ショパン全曲演奏会」を企画・監修・演奏される等、本学のみならず、我が国の音楽界やポーランドとの国際交流においても多大な貢献をされた故ハリーナ・ツェルニー=ステファンスカ先生（本年七月一日に母国ポーランドで逝去。享年七十八歳）の功績をしのび、両国の一層の交流を発展させたいとの大臣の希望により実現したもの。

### ◆退官記念「そりのあるかたち　澄川喜一展」オープニングパーティを開催

九月六日より大学美術館で始まった退官記念「そりのあるかたち　澄川喜一展」のオープニングパーティが、同日夕刻、上野精養軒において、開催された。

七百人を超える招待者が見守る中、会は宮田美術学部長の挨拶の後、遠山文部科学大臣、樋口運営諮問会議議長、平山前学長より祝辞があり、高円宮殿下の音頭で乾杯が行われた。

## 受賞

### ◆大学美術館が第四十二回ＢＣＳ賞（建築業協会賞）を受賞

建築業協会は七月二十三日、全国より応募のあった作品百七件の中から「第四十二回ＢＣＳ賞（建築業協会賞）」受賞作品を決定し、本学大学美術館（施工、鴻池組）を含む十九作品（うち特別賞二作品）に同賞を授与することを発表した。

この賞は、社団法人建築業協会が、わが国建築文化の進展と地球環境の保全に寄与することを目的に、一九六〇年（昭和三十五年）から毎年、国内の優秀建築物の表彰を行っているもの。

本学は、奏楽堂に続き、二年連続二度目の受賞となった。なお、表彰式は、十一月十四日に東京・パレスホテルにおいて行なわれる。

## 運営

### ◆平成十三年度第一回運営諮問会議を開催

六月二五日に今年度最初（通算三回目）の運営諮問会議が開催された。

はじめに、澄川学長から大学改革の取組状況等について説明し、前回会議での各委員からの意見を踏まえ取りまとめた新学部等構想中間報告書を中心に審議が行われた。各委員から、既存学部との有機的な連携の重要性、大規模改修計画案や大学美術館及び奏楽堂の活動の充実強化等、意見や提案が行われた。

なお、会議に先立ち、四月に更新された大学ホームページと附属図書館収蔵の音楽史料画像データベースのデモンストレーションが行われた。

### ◆全学教官会議を開催

七月五日、両学部教授会終了後、奏楽堂において、開校以来初めてとなる全学教官会議が開催された。これは全学会議である将来構想委員会が「新学部等構想中間報告書」を取りまとめたのを機に、澄川学長から全学教官に呼びかけて開催されたものである。

会議では、学長から、「大学改革の流れは経済財政構造改革の中で急激に加速され、非常に厳しい環境にあるが、芸大は文化立国日本の一翼を担う大学として、また、国際社会で常に高い水準を保ち、世界から注目され尊敬される大学となるべく、その存在を示す必要があり、これ

コピーライターの糸井重里氏と5人の学生によるシンポジウム「芸術家はいかにして食うか」

# 2001年度 芸術祭レポート

上野キャンパスに秋の訪れを告げる、芸大生たちの祭典〈芸術祭〉。
「宇宙リゾート」をテーマにした2001年度芸祭の風景をスナップしてみた

御輿パレードの御輿は、美校（美術学部）・音校（音楽学部）の1年生がひと夏をかけて制作したもの。サンバ隊の先導で、上野界隈を熱気で染めあげていく。今年はデザイン科・作曲科制作の御輿に最優秀賞があたえられた

## 芸祭伝説

戸島麻貴

芸術祭ではさまざまな伝説が生まれる。

芸祭の幕開けは、美校・音校の一年生による御輿パレードから。上野公園では御輿をかついで暴走する芸大生がちょっとした名物になっている。戦前から続くイベントなのだがとにかく色んなことがあったらしい。パレードのさなか、上野公園の噴水池に全裸でダイビングしたやつがいるというのは学生の間でも、メジャーな話し。サンバ部のカリスマ、バーバラさんは、パレードの先頭で素敵に踊った。彼女と目があった見物人は踊りの輪の中に拉致されるとか。夜中に酔っぱらって上野動物園のペンギンを盗みにいったというのも有名だ。ペンギンに関してはかわいかったから欲しかったという妙なコメントまで語り継がれている。

話しが脇道にそれた、御輿パレードに戻る。手先の器用な芸大生がひと夏をかけて制作するのだから、その迫力たるや圧巻である。モチーフは見栄えのする想像上の動物、麒麟、獅子、龍であったりディティールの描写の効く悪魔や神々等。その年話題になった人物や出来事を作ったりもする。おもしろいことに、それぞれの科の特性が造形に顕れる。空間における動き。質感や色彩、マテリアル。なるほど名物にもなるわけだ。また、一年生にとって御輿作りは、クラス単位での、はじめての共同作業となる。この御輿制作で各々の人間性が露呈する。あのとき何かが変わった、と芸大生は口を揃えて言う。

芸術祭は毎年違ったテーマをかかげて運営している。今年のテーマは「宇宙リゾート」だった。来るべき宇宙の時代に遅れをとってはならぬと、委員長自らが芸祭の宇宙リゾート化を推進した。前任の私に持ってきてくれた名刺にも「委員長」ではなく宇宙リゾート代表とあった。

御輿パレードでは、チームごとにユニフォームを作る。今年は協賛の上野中通り商店街で「はびこれ2001 秋冬」と題してユニフォームのコンテストが行われた

上野キャンパスのいたるところで音楽が奏でられ、アートが展示される。写真はすべて2001年度芸術祭実行委員会提供（近藤圭・美術学部油画2年／今関美晴・同学部日本画2年／小島瑞生・同前／安達祥子・油画2年／勝俣由治・日本画2年）

やるな、と思った。楽しむことに本気なのである。

最後にとっておきの伝説を。芸術祭では恋が芽生える。芸術祭で芽生えた恋を我々は芸祭マジックと呼ぶ。「何あいつら。芸祭マジックなんだー」と。ただし芸祭マジックで成就したカップルは早々に別れるというジンクスもある。結婚された卒業生もいるので、個人的には、別れるというジンクスは否定したいと思う。そして芸術祭には必ず雨がふる。しかも雨というよりは嵐がやってくる。三日間の芸術祭のうち二日は残暑きびしく、残り一日と前日は荒れ模様というのがまあ、定番の天気である。この天気はまるで芸祭そのもの。混沌として。荒々しいくせに曖昧で。これが私たちの祭り。

（としま・まき／美術学部先端芸術表現科三年・前年度芸祭委員長）

# 「デザインの風」展

## 生活の用・生活の美

### 美の本質的な機能は、生活に奉仕することにある

大藪雅孝

［デザインの風］展展示風景

［デザインの風］展は、二十一世紀の朝を告げる〝風〟をコンセプトに、戦後のデザイン美術を集大成した展覧会です。戦後から今日まで、各分野で活躍するデザイナーたちのエポックになった作品を網羅して通観する、日本でははじめての、かつてない規模と内容で公開します。

長い歴史のなかで洋の東西を問わず、あらゆるものづくりとその表現は、すべて私たちの「生活の用」に応ずることを目的としてきました。〝用〟即ち〝美〟でありデザインであったということができます。その典型は、建築、作庭、工芸はもとより、仏画、仏像は礼拝のシンボルとして、また、絵巻、草紙、肖像画、浮世絵はイラストレーションとして、さらに扇面画や屏風絵、障壁画などがあり、すべて〝用〟をもつ、装飾工芸といっていいでしょう。この装飾工芸という概念は、日本では十九世紀末に成立し、その歴史はきわめて浅いものです。ちなみに、西洋で美術の概念が工芸と区別されたのは、一八八八年のウィリアム・モリス以来です。

装飾工芸は、絵画や彫刻など〝用〟の制約や拘束からはなれ、作家がより自由に独創的世界を構築する純粋美術と比較され、これまで〝用〟のために〝美〟の純粋さを欠くという一部の偏見により、工芸の美、デザインの美は、応用の美技として位置づけられ、価値の低いことを言外に含んだ、工芸的、装飾的という言葉が使われています。しかし、人が生活を営み始めて以来、日本の美術には、絶えることのない装飾の歴史があり、古代の壁画、仏画を始め、過去のあらゆる美しいものは工芸品であり、今で言うデザイン作品です。近世の優れた障壁装飾画群をみても、装飾することが、本来の工芸的な作業であることがよく分かります。このように、日本の美の理念は、抽象的な理論ではなく、実際の行為と結びついて生まれました。したがって美の本質的な機能は、生活に奉仕することにあるということができます。

一八九六年（明治二九年）、東京芸術大学の前身、東京美術学校「圖按科」が創設され、一九三三年（昭和八年）には、工芸科として、図案部、漆工部、鋳金部、彫金部、鍛金部の五部制となり、常に工芸と図案は一体感を保ちながら歩み、一九七五年にデザイン科が新設されました。そして、現在に至る百有余年のその教育理念は、一貫して、高い造形力の基礎を身につけ、社会状況や技術の変化に対応しうる美的文化の創造力を養うことを目的としてきました。即ち〝用〟と〝美〟の融合こそ、デザイン教育の指針であり、そのことは今日に受け継がれてきています。デザインは、ジャンルの垣根がなく、あらゆる分野の造形表現を横断します。デザインとは、何を〈意〉、誰の為に〈用〉、何をもちいて〈材〉、どの様に〈技〉、を総合的に構築することであり、デザイン教育は、幅広い造形表現があるなかで、学生一人ひとりが自己の資質、才能を見いだせるよう、そして、個々の主体性に基づく専門性が発揮できるよう指導することが重要だと考えています。現在、芸大のデザイン科は、そのような教育構造で成り立っています。

会場の展示構成は、［風］をキーコンセプトとして、四つのパートで展開していきます。

「デザインの風1　日本美術の源流」

ここでは、日本のデザインの原型、源流である芸術史上の名品や意匠家の作品を回顧しながら、「生活の用」で貫かれた美の足跡をたどり、再認識しようというものです。

「デザインの風2　デザイン教育の原点」

「生活の用と美」の融合を教育理念として貫き進めてきた、東京美術学校図案部から現在のデザイン科までに関わった教官たちの作品が展示公開されます。

「デザインの風3　デザイン実現の現場」

この会場では、この半世紀余の芸大でデザインを学び卒業した人たちを中心に、そのなかから社会に新たな〝風〟を吹き込みエポックをなしたと思われる作品を展示し、同時に、グラフィック部門では、現在第一線で活躍中のデザイナーによる新作グラフィックを公開します。

「デザインの風4　映像の劇場」

ここでは、アニメ、CM、MV、実験映像、および空間照明、フライング・ロゴなどが楽しく演出され、公開されています。

この展覧会の目的は、とかく近代美術史の上で、純粋美術と比較され軽視されがちな工芸美術を、〝デザイン美学〟の面からスポットをあて、日本の美の系譜を見詰め直し、本来の美の姿が、人間に奉仕する「生活の用」であることの提起にあります。社会に奉仕する宿命をもつデザイナーは、人を明らかにせず無銘であることが多い。この展覧会を通し戦後の日本の社会に「用の美」として尽くしてきた多くのデザイナーたちのサインを明かし〝デザイン美術〟への理解を促す機会として、また、次代を担う若いデザイナーたちに夢と希望をあたえ、創作意欲をかきたてる機会となることを願っております。

（おおやぶ・まさたか／美術学部デザイン科教授）

# 平山郁夫・金興洙二人展

## 卒業証書が結びつけた二人の芸術家の縁（えにし）

竹内順一

大学美術館は日韓文化交流展として二人展を開催する（朝日新聞社と共催）。

二人は東京芸術大学美術学部（前身東京美術学校）の先輩・後輩にあたる。そもそ

も十歳以上も年の離れた二人を結びつけたのは、一枚の卒業証書である。

第二次大戦（太平洋戦争）にかかる一九三八年から四四年に東京美術学校に学んだ金興洙（キム・フンス）（八十一歳）は、学徒兵に志願しなかったなどの理由で正式な卒業証書を手にしていない。美術学部長時代の一九八八年頃、平山郁夫はこのことを聞き証書授与に尽力し、ここから二人の交流がはじまり、半世紀遅れで実現した。

金興洙は、具象と抽象表現を一つの画面で行なうことを提唱する油彩画家である。「韓国の幻想」（一九七九年）、「戦争と平和（2）」（一九八六年）などの大作の代表作がある。

平山郁夫作品は、「バーミアンの大石仏」（一九六八年）や「流水間断無（奥入瀬渓流）」（一九九四年）などのほかにユネスコ登録世界遺産を描いた素描を合わせて四十点余。すでに本年五月にソウルの「芸術の殿堂」（アートセンター）で二人展が開かれ、好評を博した。

（たけうち・じゅんいち／大学美術館教授）

平山郁夫「流沙浄土変」1976年

金興洙「韓国の幻想」1979年

**大学美術館概要**

| | |
|---|---|
| 開館 | 1999年10月 |
| 基本設計 | 東京芸術大学施設課＋六角鬼丈 |
| 総合監修 | 六角鬼丈 |
| 実施設計 | 日本設計 |
| 敷地面積 | 3,860.71m² |
| 建築面積 | 1,699.97m² |
| 延床面積 | 8,719.76m² |
| 階　　数 | 地下4階　地上4階 |
| 構　　造 | 鉄筋コンクリート造<br>鉄骨鉄筋コンクリート造<br>一部鉄骨屋根 |

## 展覧会予定

（2001.11～2002.2）

### ［デザインの風］展 DESIGN SPIRIT OF JAPAN ー生活の用・生活の美

会　期：10月6日（土）～11月25日（日）
　　月曜休館。ただし、10月8日は開館し、翌9日は休館。
会　場：大学美術館本館
観覧料：一般1,200円　高・大生700円
主　催：東京芸術大学／読売新聞社
協　力：EPSON／大日本印刷／日本板硝子／理想化学工業
お問い合わせ：
NTTハローダイヤル　03-3272-8600
http://www.geidai.ac.jp/museum/
http://www.yomiuri.co.jp/event/

### 東京芸術大学・ソウル大学校美術大学 2001年工芸科学生交流展

会　期：11月11日（日）～11月18日（日）
会　場：大学美術館陳列館
入場無料
主　催：東京芸大美術学部／ソウル大学校美術大学

10月7日から14日まで、本学の大学院学生4名の韓国派遣に続き、ソウル大学校美術大学から教官・学生8名を招き、交流展とシンポジウムを開催するもの。交流展にはソウル大より10名、本学より大学院美術研究科2年30名の計40名が出品し、11月13日（火）にシンポジウムを開催。

### ［絵画空間01］展

会　期：11月25日（日）～12月9日（日）
　　月曜休館
会　場：大学美術館陳列館
入場無料
主　催：美術学部／大学美術館

### 原　正樹退官記念展・境界の彼方へ ーBeyond The Boundariesー

会　期：12月6日（木）～12月24日（月）
　　月曜休館。ただし、12月24日は開館
会　場：大学美術館本館展示室1
入場無料
主　催：美術学部／大学美術館

1958年東京芸大美術学部金工科卒業。76年美術学部講師、82年助教授、90年教授。鋳金。

### 坂本一道退官記念展・正方形と六角形の時

会　期：12月6日（木）～12月24日（月）
　　月曜休館。ただし、12月24日は開館
会　場：大学美術館本館展示室3・4
入場無料
主　催：美術学部／大学美術館

1961年東京芸大美術学部専攻科修了。76年美術学部講師、78年助教授、83年教授。油画技法材料。

### 取手校地創作展

会　期：12月7日（金）～12月9日（日）
会　場：取手校地（茨城県取手市）
入場無料
主　催：美術学部

絵画・彫刻・工芸・デザイン科などの取手校地に通学する美術学部1年生及び先端芸術表現科学生に大学院有志学生を加え、学生が自主的に企画・運営する展覧会。

### 平山郁夫・金興洙二人展

会　期：1月8日（火）～2月11日（火）
　　1月19日・20日及び月曜休館。ただし、1月14日、2月11日は開館
会　場：大学美術館本館
観覧料：一般1,000円　高・大生600円
主　催：美術学部／朝日新聞社／駐日韓国大使館文化院／東亜日報社

### 望月積・小松敏明退官記念展

会　期：1月10日（木）～1月27日（日）
　　1月19日・20日及び月曜休館。ただし、1月14日は開館
会　場：大学美術館陳列館／取手館（茨城県・取手市）
入場無料
主　催：美術学部／大学美術館

**望月　積**　1960年東京芸大美術学部工芸科卒業。77年美術学部講師、83年助教授、93年教授。環境造形デザイン。

**小松敏明**　1960年東京芸大美術学部工芸科卒業。74年美術学部助手、78年講師、82年助教授、94年教授。機能造形デザイン。

### 平成13年度卒業・修了制作展

会　期：2月21日（木）～2月26日（火）
会　場：大学美術館本館／陳列館／東京都美術館（上野公園内）
入場無料
主　催：美術学部

平成13年度美術学部卒業予定者及び大学院美術研究科修了予定者が、在学中の制作・研究の成果を発表するもの。通称「芸大卒展」。

### 「未来映像・音響の創作と双方向臨場感通信を目的とした高品位Audio—Visualの研究」成果発表会

12月19日（水）　第1回発表10:30～／第2回13:30～／第3回15:00～
12月20日（木）　第4回発表10:30～／第5回13:30～／第6回15:00～
12月21日（金）　第7回発表10:30～／第8回13:30～／シンポジウム13:30～／第9回15:00～
会　場：大学美術館陳列館
入場無料
主　催：大学美術館／
　　北陸先端科学技術大学院大学

北陸先端科学技術大学院大学の宮原誠教授を代表とする5ヵ年共同研究の最終成果を9回に渡り発表する。人が深い感動を受ける心の用意ができるのは、暗闇、静寂のaffordance 環境であるとし、これを実現するために開発した道具を用いた創作を発表する。日本学術振興会未来開拓学術研究推進事業。

※展覧会についてのお問い合わせ
東京芸術大学大学美術館
Tel. 03-5685-7755

※展覧会の紹介は、下記のウェブサイトでもごらんになれます。
http://www.geidai.ac.jp/museum/

# "うた"シリーズ1 日本歌曲の流れ

## 失ってはいけない「過去の宝物」の数かず

三林輝夫

〈兎追いし　かの山　小鮒釣りし　かの川……〉

今や兎を追いかけられる野山も、小鮒の釣れる川も、身近にはほとんどなくなってしまった。しかしこの歌を口にすると、誰でもほのぼのとあたたかい懐かしさが胸一杯に広がることだろう。

〈しばしも休まず　槌打つ響き　飛び散る火花や　走る湯玉……〉

この歌は鍛冶屋という商売がなくなった理由などで、音楽の教科書から消えて久しい。そして、今また「荒城の月」を削除しようとする意見と、それに対する反論とがぶつかりあっていると聞く。たしかに、明治時代の漢詩・漢語を主体とした文語で作詞されているため、今の生徒には、先生の解説なしでは理解が難しいだろう。だからと言ってこの名曲が消えていって良い、ということにはならない。

文明、近代化……といった言葉のもとに、私たちは一体どれだけ過去の宝物を失ってきたことだろうか。詩人たちの魂から紡ぎ出された言葉に、作曲家たちが心血を注いで音の装いを凝らした歌曲。私は日本人の心とも言うべき日本歌曲を、大切に受け継いでいきたいと切に願っている。「荒城の月」誕生から百年、これまで生まれた、優れた日本歌曲のすべてを網羅することはかなわないまでも、四夜にわたるダイジェスト"うた"シリーズ1「日本歌曲の流れ」によって、大きな潮流を俯瞰することは、意義あることと思う。

二〇〇二年からは、オペラのアリア・アンサブル、ドイツ歌曲、イタリア歌曲等の演奏会が"うた"シリーズ2として展開される。

"うた"を愛する皆様の多大なご支援を、声楽科一同心からお願い申し上げる次第である。

（さんばやし・てるお／音楽学部声楽科教授）

# 芸大定期邦楽 第六十三回演奏会

## 難解な邦楽のイメージを払拭する

増渕任一朗

本学の定期演奏会は、大学オケ・学生オケ・声楽・オペラ・室内楽の公演等、洋楽系の教官・学部生・院生が主に演奏を行なう一方、日本音楽を総括する邦楽科も一九五三年（昭和二十八年）以降毎年定期演奏会を開催している。しかも当時から邦楽定期演奏会の場合教官と学生が、「同じ舞台を通しての教育」を最も重要なものにし、その教育を貫いていることである。このことは美風とも言えるが、実際学生に教えて、なおともに演奏するということは教える側の試練であると同時に、大所において邦楽の大切な要因を過不足なく補い得る機会となっている。当時教官として迎えられた邦楽界の巨星に学んだ卒業生の多くは、その後の邦楽を、より高度なレベルに向上させ今日

芸大定期邦楽第62回演奏会より

に至ることでも明らかである。

このように有史以来の根本を継続し続けてゆく邦楽定期演奏会の演奏内容について今日、学生が多様化している状況では、更に精密なカリキュラムや演奏・教育等多方面のコースを整備しながら国際的な受け入れも含め演奏内容をより豊かにし、しかも高めてゆくことが 私たち邦楽科教官の使命と言える。

現在、邦楽定期演奏会に配されるプログラムは、古典・現代（創作）の整合が大変良いもので、難解な邦楽のイメージを払拭する上において、本学の邦楽定期演奏会は大きく貢献しているものと思われる。新たな邦楽人口を得る最先端の発信基地が芸大・邦楽になりつつある現実をも直視しながら、教官が互いのジャンルを越える真のアンサンブルを確立するため、学生とともに演奏研究を重ねる日々を過ごしていることをこの機会に記しておきたい。

（ますぶち・じんいちろう／音楽学部邦楽科教授）

**奏楽堂概要**

開　館　1998年4月
設　計　東京芸術大学施設課　(株)岡田新一設計事務所
音響設計協力　(株)永田音響設計
形　状　シューボックスタイプ
座席数　1,140席（1階956席、バルコニー席184席、オーケストラピット使用時1,018席）
残響時間　1.7～2.4秒（天井可変装置により変更可能）
舞台機構　可変天井（客席部天井3分割、可変高さ最低10.8m～最高15.8m
主舞台（13.5m×21.4m、開口幅19.8m）
オーケストラピット（4.8m×18m、2分割、4管編成対応、昇降手摺、前舞台として使用可能）
幕類、バトン類、迫り（ひな段、道具迫り）、可動プロセニアム
各種照明設備、各種音響設備、各種舞台映像設備
パイプオルガン　フランス、ガルニエ社製（3手鍵盤、足鍵盤、76ストップ）
楽　屋　8屋。その他、スタッフルーム、楽器庫、調光室、音響調整室等

## 演奏会予定
（2001.11～2002.2）

11月 1日（木）
**平成13年度東京芸術大学音楽学部附属音楽高等学校定期演奏会**
18:00開演　入場無料（要、整理券）
［曲目］第1部　邦楽合奏
糸竹参声（増渕任一朗）／岡康砧（岡康小三郎）／琉球民謡による組曲（牧野由多可）／嵯峨の秋（菊末検校）
第2部　オーケストラ
バレエ音楽「ガイーヌ」より「剣の舞」（ハチャトゥリアン）／ピアノ協奏曲第1番変ホ長調（リスト）／ミサ曲第6番変ホ長調D.950より「キリエ」「グローリア」（シューベルト）／交響曲第2番ニ長調Op.36（ベートーヴェン）
［指揮］田中良和・鈴木織衛
［出演］ピアノ：佐藤卓史（3年）　管弦楽・合唱:附属音楽高等学校生徒他

11月 7日（水）
**室内楽特別演奏会～ハイドン弦楽四重奏曲全曲演奏シリーズその3～（第1夜）**
18:30開演　1,300円（自由席）
［曲目］協奏交響曲変ロ長調Hob. I :105（ハイドン）／十字架上のキリストの七つの言葉（管弦楽版）（ハイドン）
［出演］ヴァイオリン：甲斐魔耶／チェロ:福富祥子／オーボエ：板谷宏美／ファゴット：岩佐雅美
管弦楽:教官と学生によるオーケストラ　主宰：岡山 潔
［演出］實相寺昭雄
［語り］寺田 農

11月 9日（金）
**室内楽特別演奏会～ハイドン弦楽四重奏曲全曲演奏シリーズその3～（第2夜）**
18:30開演　1,300円（自由席）
［曲目］弦楽四重奏曲ヘ長調Hob. Ⅲ:48「夢」（ハイドン）／十字架上のキリストの七つの言葉（弦楽四重奏版）（ハイドン）
［出演］ヴァイオリン：松原勝也・岡山潔／ヴィオラ：菅沼準二／チェロ：河野文昭
［演出］實相寺昭雄
［語り］寺田 農

11月22日（木）
**芸大定期 オーケストラ第296回 "合唱付き"**
18:30開演　1,800円（自由席）
［曲目］オラトリオ「エリア」（F.メンデルスゾーン）
［ソリスト］馬原裕子・永崎京子・小髙史子（ソプラノ）／木下泰子・在田恭子・枝野朝子（アルト）／岡田尚之・児玉和弘（テノール）／佐々木直樹・藪内俊弥・小野和彦（バス）
［指揮］エルヴィン・オルトナー
［合唱］音楽学部声楽科学生
［管弦楽］管弦楽研究部

11月11日（日）
**ウィーン国立音大と芸大生による室内楽コンサート**
14:00開演　入場無料
［曲目］弦楽三重奏曲c-moll Op.9-3（ベートーヴェン）　他

11月27日（火）
**芸大定期 吹奏楽第67回**
18:30開演　1,300円（自由席）
［曲目］世界三大マーチ集（Ⅲ）：美中の美（J.P.スーザ）／ウィーンはいつもウィーン（J.H.シュランメル）／ハンガリア行進曲（H.ベルリオーズ）／ロメオとジュリエット（P.チャイコフスキー）／吹奏楽のためのシュビール（E.トッホ）／ハイドンの主題による変奏曲作品56（J.ブラームス）／リンカーンシャーの花束（P.グレンジャー）
［指揮］ゲルノート・シュマルフス
［演奏］音楽学部管打楽器専攻学生

11月29日（木）
**"うた"シリーズ1　日本歌曲の流れ　第三夜**
18:30開演　1,300円（自由席）
［曲目］山田一雄〈もう直き春になるだろう〉／高田三郎〈「ひとりの対話」より　くちなし 他〉／石渡日出夫〈汚れっちまった悲しみに，鹹湖〉／伊福部昭〈「ギリヤーク族の古き吟誦歌」より　熊祭りに行く人を送る唄〉／間宮芳生〈南部牛追唄〉／早坂文雄〈うぐいす〉／石桁眞礼生〈ふるさとの，鴉　他〉／別宮貞雄〈さくら横ちょう，「淡彩抄」　よりほたる　他〉／柴田南雄〈「優しき歌」より　爽やかな五月に，さびしき野辺〉／畑中良輔〈秋の空，花林〉／大中恩〈しぐれに寄する抒情，昨日いらっしって下さい〉
［出演］三林輝夫、伊原直子、平野忠彦、永井和子、佐々木典子、高橋修一、高橋啓三、三縄みどり、大島洋子、平松英子、日比啓子、福井敬、大学院声楽専攻学生

11月30日（金）
**芸大定期 オーケストラ第297回～学生オーケストラ演奏会～**
18:30開演　1,300円（自由席）
［曲目・出演］ピアノ協奏曲ト長調（ラヴェル）　ピアノ:日下知奈　指揮:松尾葉子／スペイン狂詩曲（ラヴェル）　指揮：小田野宏之／歌劇「ラ・ボエーム」第3幕より「四重唱」（プッチーニ）　松岡万希，王真紀（ソプラノ）　・志田雄啓（テノール）・宮本益光（バリトン）指揮：田中良和／ローマの松（レスピーギ）　指揮：田中良和
［管弦楽］音楽学部学生オーケストラ

12月4日（火）
**芸大定期 邦楽第63回**
18:30開演　1,800円（自由席）
［曲目］箏曲「編曲　都の春」／尺八「衆籟」／箏曲「防人の歌」／日舞・長唄・清元・邦楽囃子「春夏秋冬」／能楽「船弁慶」
［出演］各講座の教官及び学生

12月12日（水）
**第51回メサイア公演**
**歳末助け合いチャリティコンサート**
**［会場：東京文化会館大ホール］**
18:30開演　3,500円（A席）／2,500円（B席）／1,500円（C席）
［曲目］メサイア（G.F.ヘンデル）
［ソリスト］音楽学部学生および大学院音楽研究科学生
［指揮］小泉ひろし
［管弦楽］管弦楽研究部
［主催］朝日新聞、朝日新聞東京厚生文化事業団
［協力］音楽学部
［チケット販売］銀座プレイガイド、東京文化会館チケットサービス03-5815-5452

12月15日（土）
**うた"シリーズ1　日本歌曲の流れ　第四夜**
15:00開演　1,300円（自由席）
［曲目］中田喜直〈「六つの子供の歌」より風の子供，おやすみ　他／團伊玖磨〈「五つの断章」より　舟歌，朝明　他〉／小林秀雄〈瞳，落葉松，演奏会用アリア「すてきな春に」〉／湯山昭〈木犀のセレナーデ，たにし辛み唄〉／林光〈「四つの夕暮の歌」より　誰があかりを消すのだろう　他〉／浦田健次郎〈「八木重吉の詩による六つのうた」より　素朴な琴　他〉／三善晃〈「聖三稜波璃」より　いのり，青空に　他〉
［出演］朝倉蒼生、伊原直子、三林輝夫、嶺貞子、林康子、永井和子、渡邊明、大島洋子、高丈二、大学院声楽専攻学生

12月21日（金）
**第21回台東第九公演（台東第九公演実行委員会主催）**
19:00開演　2,000円（自由席）
［曲目］交響曲第9番 ニ短調作品125「合唱付き」（ベートーヴェン）
［ソリスト］小高史子(S)，小野和歌子(A)、志田雄啓（T）、原田圭（Br）
［指揮］尾高忠明
［管弦楽］管弦楽研究部
［合唱］台東区民合唱団
※お問い合わせ先
03-5246-1441　台東区教育委員会

2月12日（火）
**芸大定期 室内楽第28回　第1夜**
18:30開演　1,300円
［曲目］未定　［出演］未定

2月13日（水）
**芸大定期 室内楽第28回　第2夜**
18:30開演　1,300円
［曲目］未定　［出演］未定

※演奏会の曲目・出演者については、変更することがあります。
※本学には駐車場はありませんので、お車でのご来場はご遠慮ください。
※チケットの取り扱い
チケットぴあ03-5237-9990／東京文化会館チケットサービス03-5815-5452／東京芸大大学美術館ミュージアムショップ（大学構内）
※上記の演奏会の他、「木曜コンサート」（会場：上野公園内旧東京音楽学校奏楽堂）「学内演奏会」の日程については、下記にお問い合わせください。
※チケット・演奏会等のお問い合わせ先
音楽学部演奏係　03-5685-7700
※演奏会予定は、下記のウェブサイトでもごらんになれます。
http://www.geidai.ac.jp/

東京芸術大学広報誌 藝大通信 no.01 OCTOBER 2001 編集発行 東京芸術大学広報委員会